017249-000-5

特18-887

人となる道随行記

小松　明觀／著

M30. 4

ABE-0629

葛城慈雲尊者垂示

人身安苗道隨行記

三寶舘藏版

人登奈留道隨行記叙

上根の人此道によるべし。中下根の人の道によるべし。是を人となる道と名の佛世より。傳承して。今日に至る。安永のはじめ。吾師京師にあり。時に緣事ありて。有緣緇素のために。十善戒を授與す。因に略してその趣を記せり。こゝに二三子拜閲して。置ことなき更にその戒相を聽受せんことをねがふ。月の八日二十三日は。佛世より。承來て垂誡の日たり。こゝにその請に應じ。安永二年癸巳十一月二十三日より起首し。同三年甲午四月八日に至りて。乃至不邪見戒滿ぜり。承受のゝの隨て

これを記し。十二巻を成就す。その略をねがふ者。その廣をねがふものとともに。佛世の正法上中下根に。をし通じて。此分あることをしる。知ものは。いよ〳〵すゝむ。日々受持し、時々讀、誦し。左之右之。みづから心地を照さんことを請す。吾師これによりて。光の暑せる一本を。校正して。再びその求に應ぜり。其中文句あるひはかくれ。義理或は通じがたし。こゝに於て小子等指示を蒙りて。暑して注解す。彼上中下根。此道によるもの。相共にふみをこのふて。迷謬なからんことをねがふのみ。因て是を隨行記と名づくるなり

弟子某等謹識

二

人となる道隨行記

葛城慈雲尊者垂示　小子比丘法護　小子比丘諦濕　小子沙彌德賢　稽首拜記

特18
887

人となる道。此人と共にいふべし。此道を全して。天命にも達すべく。佛道にも入るべきなり。十善あり。世間出世間に。をし通して大明燈となり

此第一段。はじめに道の綱要を。顯示するなり人となる道とはむかしより。人間にして。人間の分齊を。うしなふ者おほし。大聖佛世尊。この世に。出現し玉ひて。この人をして。人たらしむ。是を人となる道と名づく。凡佛法は主として。生死出離の深義を說ども。初門はこの人となる道なり。若深密の義によらば。此人間世界も。佛淨土に。異ならぬなり

此人と共にいふべしとは。此人間世界は。賢聖の在處なり。佛のあらはれたもふ處なり。この人間は賢聖とも。なるべく。佛とも
なるべき器なり。此道甚深なれども。現今の人を除て。外に大根
機を。擇べきにあらず。智者も。愚者も。貴人も。賤者も。をし
なへてもらさねば。此人と。ともにいふべしと。いふなり
全してといい。十分會得して。身におこなふを。いふなり
天命にも達すべくとは。はしめに。十善の德をあらはす。天とは
上に位し。蒼々として。測かたきものなり
此中に道あり。命あり。道とは。しかるべき。道理なり。命とは
上より下にほどこす禍福なり。をよそ。人のこの地上に居る。禍
あり。福あり。此禍も遇然として。出たるものにあらず。此福も
智慧才藝を以て。求得ものにあらず。皆定る。ところありて。一

生まぬがれぬなり。儒者これを天命と名づく。論語に。孔子五
十にして。天命を知といふ是なり。若人たる道を全しおこなふ
ものあらば。內心あきらかなること。鏡の塵垢をはなるゝがごと
し。此人よく。天命に達するなり
佛道にも。入へきなりとは。佛道とは。をし通じて。今世後世に
大安樂を。あたふる法なり。をよそ。道に入者。天命に達して。
更に天命の出て來る處を察すれば。必ず佛道に入といへり。世間
の賢人君子たる者は。その中。世間一分をとり用て。仁義等の道
を說。聲聞。緣覺。はその中。出世間の一分を得て。生死を解脫
す。菩薩は。全分に達して。無上道をうるなり
十善ありとは。道に背を惡といふ。道に順ずるを善といふ。此善
十種あれは。十善といふなり。世間とは。三界なり。三界とは。

欲界。色界。無色界なり。此男女あり。飲食ある處を。欲界といふ。この身心男女飲食等の欲を。はなれて。禪定相應する處を。色界といふ。此身相をはなれて。其心のみ禪定相應する處を。無色界といふなり

出世間とは。此三界の繫縛を。はなれて。無漏聖道に入なり

大明燈となるといい。燈とは。たとへなり。佛日涅槃の山に。かくれたまふて。世界暗冥なること。深夜のごとし。此時この法ありて。世の暗冥を。てらす。故に大明燈といふなり

十善といい。身三。口四。意三なり。不殺生。不偷盜。不邪婬これを身の三善業といふ。不妄語。不綺語。不惡口。不両舌。これを口の四業といふ。不貪欲。不瞋恚。不邪見是を意の三善業といふ

此第二段。上をうけて。十善の名相を出すなり。十善とはと云は

標文なり。身三。口四。意三。なりとは。一切の業。三業に攝す身業。口業。意業なり。身業に三つあり。是を身三といふ。口業に四あり。これを。口四といふ。意業に三あり。これを意三と云ふなり

不殺生とは。生とは。いきとし。いけるものなり。この生きとし生るもの。命根ありて。世に住す。殘忍の心にて。此命根を斷ずる殺生といふ。道を守りて此殺生をはなるゝを。不殺生といふなり

不偷盜とは。偷もぬすむと訓ず。盜もぬすむと訓す貪欲の心增長して。我分限の外なる物を。とり用るを。偷盜といふなり。道を守りて。此偷盜をはなるゝを。不偷盜といふなり

不邪婬とは。男女の愛欲を婬といふ。此に正あり邪あり。正とは

正しき。夫婦の道なり。邪とは道ならぬ婬事なり。道を守りて。此邪婬をはなるゝを。不邪婬といふなり

是を身の三善業といふとは。上を結ずる文なり。身業無邊なれども。此三種より外はなきなり

不妄語とは。語は語言なり。此語言の道かならず。眞實なり。道をうしのふて。人を欺を。妄語といふ。眞實を守りて。道に順ずるを。不妄語といふなり

不綺語とは。綺は絹の名なり。斜に摸樣ある絹なり。此言語の道は。必ず質直なり。此道にそむきて摸樣にわたるを。綺語といふ

道を守て。質直なるを不綺語といふ

不惡口とは。言語の道かならず。柔輭なり。此道を失て。麁言毀訾するを。惡口といふ。徐に言て麁ならぬを不惡口といふ

不両舌とは。人間の道として。親好なるを。本とす。もし他の親好を。嫉でこの言を。かれにつたへ。彼の言を爰につたへて。その親好を。破するを両舌といふなり。彼此の言をつたへず。其親好を悅を。不両舌といふなり

是を口の四善業といふとは。口業無邊なれども。此四に出ることなし

不貪欲とは。人間の本心をのづから。外にもとめぬものなり。若世の名利に。我心をみだされて。むさぼり。求るを。貪欲といふなり。足ことを知て。本心の道に順ずるを。不貪欲といふなり

不瞋恚とは。人間の心本より。柔和なるものなり。人を憐むものなり。此道にそむきて。いかりふづくみ。嫉妬するを。瞋恚といふ。慈悲忍辱にて。道に順ずるを。不瞋恚といふなり

不邪見とは。人の道として。善をこのみ。惡をにくむものなり。其中一類の伶俐の人。道理をおもひはかりて。決擇するを見といふ。此見に。邪あり。正あり。正道をうしなひて。邪曲に走を邪見といふ。道理の極成して。有無に偏よらぬを。不邪見といふなり。これを意の三善業といふとは。意業無邊なれども。此三に過ずいとへり

此中傳戒相承の義あり。上品の護持は。天上をよび輪王の德なり。中品の護持は。萬國諸王の位なり。下品の護持は。人中豪貴の報なり。若は分受。もしは護持。闕失あるは。小臣民庶の等級なり。小人の富榮長壽なる。王公の短命なる。或は多病なる。あるひは。貧にくるしむ。等みな準じしるべし

此三段。上を結して。十善の德を。示せるなり。此中とは。上を指ことばなり。今上をさして。くはしく釋し示す。故に此中とは標するなり

傳戒相承の義ありとは。佛法みな師承あるべし。佛在世文殊。彌勒。迦葉。阿難等より。師資相うけ來り。今に至るまで。此十善をつたふるなり

上品の護持はとは。此より下三品の。わかれを示すなり。若具に分別せば九品あるべし。今はまづ三品によるなり。身心道に順して。受戒の日より。違犯なく。たまたま違犯あれば。速に懺悔するは。上品の護持に攝ずるなり

天上をよびとは。この世界。天あり。人あり。四天王已上に。六欲天あり。その上に色。無色天ありと云り

輪王の德なりとは。經の中に四種の輪王と說り。金輪。銀輪。銅

輪。鉄輪のしな。別なりといへり

中品の護持はとは。護持こゝろざし。深けれども。身口時々に失あり。犯に隨て懺悔して。大過にいたらぬなり

萬國諸王の位なりとは。佛世の頻婆遮羅王。波斯匿王等。みな諸王の位なり

下品の護持はとは。志なきにあらねども。純一ならず。あるひは時勢によりて。大過にいたらず或は善友の助にて。善にすゝみ護持する等なり

人中豪貴の報なりとは。もろ〳〵の。官職あるもの。威名ある者祿位ある者の名なり

已上。上中下品は。傳戒相承の義なり。清涼國師の。華嚴の疏等は此に異なり。又未曾有經に。下品十善謂一念頃。中品十善謂一食頃。上品十善謂從旦至午。於此時中。心念十善止於十惡といへり。此等の異說あるなり

若は分受とは。一戒二戒を。持等を分受といふ。此中現今に身心なやみなく。長年をたもつは。不殺生の餘慶なり。世に處して位あり。祿あり。榮曜ながく持は。不偷盜の餘慶なり。室家和し。內外の眷屬みな。心にかなふは。不邪婬の餘慶なり。餘みな準ドしるべし

若は護持闕失あるはとは。闕とは。若は多。若は少違犯あるなり失とは時々道にそむきて。守をわするゝなり

餘經の中に。殺生の一戒を持ては。四天王處に生ず。殺盜の二戒を持ては。三十三天に生ずる等の。文あれども。今家は如上の義を。つたふるなり

此第四段異說を。擧て相承に比對するなり

世善相應の中も。此德むなしからず。若眞正に此道によるものは。諸佛菩薩も自己心中より。現ド一切法門もその身に。そなはるなり

此第五段世善に比對して。眞正の功德を。顯示す

世善相應の中とは。上の三品の差別なり

眞正にこの道によるものはとは。華嚴經十地品のなかに。上品の十善。聲聞の道果。緣覺の道果。菩薩の道果を成ずることを明せり。上々品の十善乃至佛果を。成することを明せり。諸佛菩薩も。自己心中より。現すとは。觀無量壽經に。諸佛正偏知海從心想生ずといへり

若これにそむけば。十惡業を成ド。人たる道をうしなふ。梵網經の中。慇懃丁寧に。呵し玉ふところなり

此第六段違失の德を示して。上を結するなり。是に背とは。十善をうしなふなり

十惡業を成すとは。一切惡業無盡なれども。此十惡に攝し盡すなり。人たる道をうしなふとは。現在に人たる道にたがへは。後生には三惡趣に入といへり

梵網經とは。經に云。故起心毀犯聖戒者不得受一切檀越供養亦不得國王地上行不得飲國王水五千大鬼常遮其前鬼言大賊文同云不受佛戒畜生無異木頭無異と。等の文なり

第一不殺生

人の命根ある。法性の德なり。此生死界のなか。慈悲心の淺深によりて。分に此命根をうく。慈悲ふかきものは。無病長壽を得。慈悲すくなきものは。多病短命なりといへり。經中に無量壽佛あ

り。此法性の德成就せる名なり。金剛壽命菩薩あり。世間短命の業を轉じて。法性の德をあらはす名なり。此不殺生戒その義をもふべし

世界幾許かある。虛空界のある處。これ世界海なり。衆生いくばくかある。世界海のあるところ必衆生ありて充滿す。この世界海衆生界ことく〳〵く業相緣起の儀にして。我他。彼此。苦樂。昇沈。のある處なり

此一段世界の緣起。衆生の緣起を。標するなり。支那國の人おほくは。唯一世界とおもひ。葱嶺流沙の東南一邊の地を。中國と名づけ。餘を夷狄。外國といへり。たまさか鄒行か類は。支那九州のほか別に。九州ありといへり。しかれども。その說奇怪にして依用しがたし。正くいはゞ。天地の分齊一多をいふべからず。今

此には。法性緣起の。趣に約して。虛空界のあるところ。是世界海なりといふ。衆生の分齊もしるべからず。今法性緣起の。趣に約して。世界海のある處かならず。衆生ありて。充滿すといへり

我他彼此とは。衆生迷執の本なり。此身を見。他身を見。みづから冷暖をしり。他の音聲をきく。自他あるに似たるなり

苦樂とは。しばらく此人間の中に。果報すぐれたるものは。樂あり果報劣る者は苦あり。貴賤も。智愚も。まぬかれぬ事なり

昇沈とは。しばらく。此人界の中には。高貴を昇といふ。下賤を沈といふ。若人天相對せば。天上は昇なり。人間は沈なり。更に餘義ありおもふべし

此一大緣起の中。肉眼所見の分齊に。此人となる道。とこしなへにあらはれ存するなり。この道の中。人趣尊尙にして。禽獸卑賤なり

經律の文に。人を。ころすを。大殺生といふ。禽獸を。殺を小殺生といふ

此一段上を。うけて殺生の中。輕罪重罪差別することを示す

此一大緣起の中とは。上の一段の文意なり

肉眼所見の分齊とは。此人界現今にあらはるゝ事物を指ていふなり

此人となるみち。とこしなへに。あらはれ。存するとは。此人中南贍部州に。道のあるをいふなり。長阿含經云。佛告二比丘一閻浮提人有二三事勝一餘一三洲及諸天一何等爲三一者勇猛强記二勤修梵行一三者勇猛强記二佛出二其土一云云

行二一者勇猛强記二勤修梵行一三者勇猛强記二佛出二其土一云云

此道の中人趣尊尙にして。禽獸卑賤なりとは。龍河修羅の。果報は。すぐるゝことあれども。人趣を尊とす。その餘の禽獸は。勿論の事なり。經律の文とは。諸經諸律の通義なれば。通ずて經律の文といふなり

大殺生の中輕重あり。恩ある人は。その罪さらにおもし。父母等を打罵し。若殺害にいたれば。逆罪を成す。庸流には棄罪を得。罪惡のものは。あるひは。蟻子よりもかろし

此一段。大殺生の中に。三品の差別あることを示す。みな經律の文なり

小殺生の中又輕重あり。能變形の者は。罪をもし。不能變形のものはかろし。能變形とは。小伎倆ありて。人の姿とも。化しうべき者なり。不能變形とは。極底下。愚昧にして。化することもなき類なり

此一段小殺生の中。二種差別あることを示す

能變形とは。諸龍の類。よく人の形と化すといへり
不能變形は。犬豕の類なり。伎倆は。伎能といふかことし。俗に
云才覺藝能の事なり
此輕重の罪。おの〳〵方便。根本。の差別あり。方便とは。前脩に
名づく。助成の義なり。工人其事を。善せんとして。まづその器を
利す。千里の行あるもの三月糧を。つゝむといふの類なり。根本と
は。究竟に名づく。成遂の義なり。山にのぼる者すでにその嶺をき
はめ。海をわたるもの。彼岸にいたる類なり
此一段。方便罪。根本罪の二種を示す
この輕重のつみ。をの〳〵方便根本の。差別ありとは標文なり。
罪業の二三分より。八九分にいたりて止を。方便罪といふ。十分
滿足するを。根本罪といふなり。方便とは前脩に名づく。助成の

義なりとは。方便の名義を解するなり
前脩とは。前後に對するなり。脩とは。おさむと訓ず
究竟とはきはまり。おはると訓す。成遂は。なしとぐると訓す。
老子經の字なり
工人其事を。善せんとして。先其器を。利すとは論語に。工欲善
其事必先利其器
千里の行あるものとは。莊子逍遙遊云。適百里者宿舂糧。適千里
者三月聚糧文
山にのぼる者とは。これ傳戒家相承の。たとへなり
此中もし。殺具をまうけ。毒藥を調し。打きずつけ。そこなひ。敗
るを。方便罪といふ命のつくるに。いたるを。根本罪と名づく。是
みな犯相なり。更に持相をしるべし

此一段この戒の方便罪。根本罪の犯相を示す
殺具をまふくとは。網をはり。穽をつくる類なり
打とは。手あるひは。棒等を用て。うつなり
疵つけとは。他の身分に。疵をつくるなり
傷敗とは。他の身分。一指。乃至手足。皮膚等を。傷破するなり
初に人趣の尊を信じ。如上の惡業を。遠離するを。不殺人と名づく
次に此仁慈の。擴充て禽獸。蟲魚におよぼすを。不殺生戒と名づく
終に賢聖の地位に至て。草木國土までに及なり
此一段此戒護持の心相を。示すなり。經中に慈悲心を脩習する人は。初に父母の恩をしるべし。次に人趣の尊を憶念し。漸次に一切衆生に及すといへり
若死すべき者の。命をすくふ。その功德おほし。佛在世に。目蓮尊

者の弟子沙彌あり。此人短命の相なりしが。ある時道路のなか。衆多蟻子の水にたぼるを見て。その命をすくふ。是によりて。夭折の相を轉ずて。長壽を。得しといふ類なり
此一段他命を救ふ。德を示すなり。是は現在にその德あらはれし緣事なり。この現報を以て。他世の德をはかり。しるべきなり
能この戒を。守るものは。一切人民。一切世界みるところとして。慈悲心ならざるなく。聞ところとして。慈悲心ならざるなく。衆生無邊なれば。戒もまた無邊。虛空無邊なれば。戒もまた。無邊なり
この一段戒德の廣大を示す
能此戒を。まもる者とは。謹愼奉持の人なり
一切人民と一切世界とは。心相の廣大なるなり。その慈悲の行は因緣に隨て。多少あるなり

見聞とは。緣の博をいふ。其慈悲の行は。近き處より始るなり
衆生無邊なれば。戒もまた無邊なりとは。功德の增長なるをいふ
なり。その義おもふべし
此德ちかくは。人天の中に無病長壽の報を得。遠は無漏道に達して
金剛不壞の身を得べし。壽命無量の佛その名を聞ん。その名をな
ふるゝ。億劫生死の重罪を。のゞくといへり
此一段戒德の甚深を。示すなり。不殺生の法は他を惱さゞるゆへ
に。病苦なく。他の命を奪ざるゆへに。長壽を得といへり
無漏道とは。聖者の道。諸〻の煩惱の連注流散なき故に。無漏とい
ふなり。たとへば器物の完具にして。漏泄なきが如く。屋宅の堅
固にして。雨漏なきがごとく。煩惱の現行なく。性淨圓明なる義
なり

金剛不壞の身とは。佛身をいふなり。一切生死の身は無常四相に
うつされて。堅固ならず。佛身は常住不變にして。金剛のごとし
金剛とは。寶の名なり。此金剛火に入てもやけず。鐵鎚を以てう
つに碎すといへり。
壽命無量の佛とは。梵言の阿彌陀。此には無量壽といふ。慈悲心
一切世界。一切衆生に徧滿せるの名なり。觀經に佛身とは。大慈
悲是なりといへり
同云稱佛名故除五十億劫生死之罪といへり

第二不偷盜

人の福分ある。法性の德なり。福德莊嚴の寶生如來あり。虛空藏
菩薩あり。此法性の德を。あらはす名なり。善根の衆生。分にこ
の福德を得て。人間界に生ず。此不偷盜戒の義思惟すべし。習度

論十三云不與取有二種一者偷二者刼といへり。資持記云非理損者爲盜公自取者曰刼畏主覺知爲偷盜名通攝すといへり

法性の緣起せる。世界淨穢わかれ。業相の等流する衆生。此許に死しかしこに生ず

此一段通じて。緣起の趣を。のぶるなり

法とは。規度定りて。任持する義なり。性とは不改の義なり。異緣なりて。改らぬを。性といふなり。此法性その本體は。あらたまらねども。緣ありて。發起するなり。是を緣起といふ

世界淨穢とは。諸佛菩薩に。無漏業といふあり。清淨なる法門より。緣起する世界は。淨世界なり。衆生に善惡の業ありて。それより緣起せる。世界は穢土なり。此善惡業の。世界の中にも。諸天は純一に七寶莊嚴なり。三惡趣は純一に。熱鐵熱沙等なりといへり。此人間は雜業の感ぜる。世界なれば。金銀珠玉もあり。瓦礫砂土もあるなり。既にこの差別あれば。金銀珠玉は貪求と相應し。瓦礫等は。厭離と相應す。この差別ありて。偷盜の緣となるなり。故に初に標して。世界わかれといふなり

業相の等流とは。此業相過去より。現在に來り現在より未來にさりて。流水の斷ぜざるごとくなるを。業相の等流といふなり。此業相衆生を縛して。轡の馬を引がごとく。鼻木の牛を。ひくがごとくなるを。爰に死し。かしこに生ずといふなり

此衆生の人中にありて。自他相對する。君臣上下あり。苦樂貧富あり。山海をの〳〵界限ありて。封疆みだれず。財利おの〳〵分齊ありて。彼此混ずることなし。親子いたりて。親しけれども。父病ひあるとき。その子かはることあたはず。子の痛を父母わかち忍こと

あたはず。耳目相ならべども。視と聽と代り。もちゆべからず。緣起法として。かくのごとし。業相法として。かくのごとし

此一段上をうけて。分齊楷定せるをのべ。この盜戒の相を。おこすなり

此衆生の人中にありて。自他相對するとは。此十善三界に。通ずれども。人となる道なれば。人中を本とす。故に人中を標するなり

君臣上下ありとは。位階の差排なり。これ人中の有樣にして。十善上中下品の儀なり。此儀にそむけは。人たる道にそむくなり。故に初に標出して道の軌範とするなり

苦樂貧富ありとは。是は受用の分齊なり。此分齊人中にありて。善惡のあらはるゝ姿なり。これ中苦をいとひ。樂をもとめ。貧をきらい。富をねがふに就て。下の盜心の緣となるなり

山海をの〳〵界限ありて云云とは。上をうけて正しく。異心をおこすまゝきをいふなり親子いたりて。したしけれども。父病あるとき云云とは。喩を以て盜心の理に。そむけるをいふなり

緣起法として。かくのごとし云云とは。上をむすぶ文なり

此業相の中。他の財物を侵し奪て。自己の利となすを盜といふなり

たとい自已に利なきも。若は燒。もしは埋て。他の財物資具を損壞するみな。破戒なり

此一段畧して。戒相を示すなり

此戒亦方便根本の差別あり。はゞめ盜心を發するより。或は言にあらはし。或は身手を動する。種々作業は。方便罪を成す。他の財物もしは。自已に屬し。若は損壞すれば。根本罪を結するなり。已下

の諸戒。みな準ずしるべし

此一段方便根本の差別をいふなり

此戒その相ひろし。借りてかへさぬ。問ずしてみだりに用る。損して償ぬ。專に用て。他の用をさまたぐ。同く勞して。我ひとり賞にあたる。簿藉をたがへ記して。私をまじふる。下を虐して。上にへつらふ。上を侵して。下にまどはる。彼を減ずて。此に增し。爰にうばいて。かしこに。與ふる等なり

此一段戒相なり

彼を減じて云云とは。世に富商大農は。榮曜王公にひとしく。貧民窮巷は。衣食つねにたらぬ習なり。上たる人の眼よりみれば。同ど民の中苦樂はるかに。隔れども。彼を減して。此に增ぬなり但し貧民の。死亡に至らぬを。要をすといへり。儒者書生の類が

是を憤て井田を。誘は非なり。支那に王者が。井田の法を立は。新に田土を闢て。來者を安置する術なり。貧富すでに。定る。後富者の田を奪て。貧民と等くするにはあらざるべし。むかし厥文公。孟子の教を受て。井田を行へども。その功商鞅百里奚にもしかず。國終に亡たり。漢王莽明建文君も同條なり

又財物のみならず。詩文章家の。他の佳句をぬすむ。農夫の田際を〻かず。或は溝渠に穴をうがちて。他の水をぬすむ等なり。有司の賄賂に耽て。理非をわけ判するは。其中の大なるなり。庸夫の一日の扉をうけて。其事におこたるは。一日の盜なり。子として孝ならぬは。終身の盜なり。臣として忠ならぬは。滿家の盜なり

此一段ひろき戒相を明すなり

能この戒に住する者は。佛物互用せず。法物互用せず。是を私にも

ちひず。市廛の利は。商賈その産業を全し。田作の利は。農人その樂をうしなはず。君は常に君たり。是を萬世に傳て。恩惠をほどこす。臣はとしなへに。臣たり。これを遠裔に守て。忠義を全ず。下は上の威名をうらやまず。上は下の利を。かたよらざらしむ。他の才をかくさず。人の德をおほはず。鳥獸の巢をやぶらず。龜魚の水を涸さず。時ならねば。花を折ず熟せねば。菓をとらず。名を嚚とは。家にまもり。財と穀と是を國にもちゆ

此一段護持の規則を示すなり

能この戒に住する者とは。人を指のことばなり佛物互用せずとは律文に佛物を。法もしは僧に用るを。互用と名づく。又釋迦佛の物を。彌陀佛に用るも。互用と名づく。是は佛には自他の心なけれども。先に施主たりし。人の志を。たがふ邊に。罪を結するなり

法物互用せずとは。是も法物を。佛に用るも。僧に用るも。互用の罪あり。又般若經となすべき。財物を華嚴經等に用るも。互用なり。法に差別なけれども。先に施主たりし。人の志をたがふ邊に。罪を結するなり

市廛の利云云とは。十善は大人の人民を。治る道なれば。此等のことあるなり

君はつねに君たり。是を萬世に傳て。恩惠を施すとは。十善の法は。楷定を守るといへり。堯の舜に讓り。舜の禹に讓る類。その聖人至公の心は。尊むべきなれども。萬代にをし通ずるの。道ならすといへり。具には。十二卷法語の中のごとし

臣はとしなへに臣たり。是を遠裔に守て。忠義を全すとは。十

善人臣の道なり。支那國に湯の桀を放ち。武王の紂を伐ち。民を塗炭にすくふ。志は好すべきなれども。万代知愚賢不肖に。をし通ずる道ならず。周の代武王周公の聖たる人。相つゞき出たれども。其治世といふは成王康二代のみ。第四代昭王に至て。身を他國に沒せり。穆王已後亂世相續漸次微弱にして。小國の諸侯にひをしといへり。孟子は。聞誅一夫紂矣未聞弑君也といへとも。十善の道には許さぬことなり。此十善は万國古今に。をし通ずる道なれば。儒者の道とは。大に異なるなり

下は上の威名を。うらやまず云云とば。皆不偷盗の志なり

時ならねば。花を折らずとは。經文に沙彌蓮花池邊嗅華香池神呵云盗我蓮花香と云云

熟せねば菓をとらずとは。律文は六群比丘。在菴摩林。取未熟菓佛言。菓未熟不得取。と云云

名と器とは家にまもりとは。老子に。邦之利器。不可以示人。と

いへり

その德有情非情に。をしわたりて。近くは人天の中に。富饒の報を得。遠くは万德莊嚴の。佛身土をうべし。此福德門。一切群生を。攝取して。捨せず

此一段功德をのへて結ぶなり

近くは人天の中に。富饒の報を得とは。有漏善の功德なり世の貧窮なるものは。過去世の偷盗の餘業なりといへり。此戒護持の人は。生々の處に富饒なりといへり。遠くは万德莊嚴の。佛身土をうへしとは。無漏善の功德なり。佛の淨妙の色身。淨妙の報土。これみな。無量切不偷盗戒滿足の儀といへり

此福德門。一切群生を。攝取して捨せすとは。觀經に復有八万四千光明。一一光明。遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨といへり。福德門は。人民を。攝取するの具なり。佛世尊福德の身相を以て衆生を。攝取し。莊嚴の報土を造立して。一切衆生を。攝取するなり

第三不邪婬

世間男女ある。法性の德なり。世人の惑おほく。此男女より生すれば。遮情門の邊に。諸欲の染汚を呵す。法性法爾なれは。表德門の邊に。男を慧に配し。女を定に配す。道を守るものは。世間出世間の勝安樂を得。道をうしなふ者。ちかくは。國をみだし身をやぶり。人間相應の善を。破して惡趣の門をひらくなり。智度論十三に。邪婬者若女人爲父母兄弟姉妹夫主兒子世間王法守護若犯者是名邪婬といへり

佛身をしらんと欲せは。衆生業相の中にみよ。解脫法を。知と欲せば。此生死海の中に。もとめよ

此一段通して。緣起の趣を。のぶるなり。佛法の中。小根劣機なるものは。衆生界のほかに別に佛界ありと。おもふて心外に。佛を求るなり。生死界の外に。別に涅槃界ありとおもふて。灰身滅智をもとむるなり。大根機。菩薩なり。人は法に取捨なし。情に憎愛なし。臨濟の錄にも。汝もし聖を愛し。凡を憎ば。生死海裏に浮沈せんといへり。大慈悲門は。一切衆生を緣として。佛身を見。大智慧門は。生死海を緣として。大涅槃に住すといへり生死海の中。此天地あり。天地あれば。その儀あり無といふべからず。此陰陽あり。陰陽あれば。其德あり。なしと云べからず。この

男女あり。男女あれば。その情欲あり。無といふべからず

此一段上をうけて。男女婬戒の。理義を明せり。生死海の中。と

の天地あり云云とは。易繫辭上に。天尊地卑乾坤定矣。卑高以陳

貴賤位矣。動靜有常剛柔斷矣といへり

此陰陽あり云云とは。同書に一陰一陽之謂道繼之者善也成之者性

者也仁者見之謂之仁知者見之謂之知といへり

此男女あり。男女あれば。其情欲あり。なしといふべからずとは

同書に乾道成男。坤道成女。乾知大始。坤作成物と云り。孟子に

飲食男女人之大欲存といへり。生死海の中。外典内典其義あひわ

たるなり

此人情あるもの。道をつたふるの器なり。漸次に道を全せば。賢聖

の地位にもいたるへし。無漏道にも達すべし

此一段上を受て。道の男女身中に基せることを明すなり

この人情あるもの。道をつたふるの器なりとは。佛說に此男女な

る者。道をうるとあり。律に佛在世に。不能男なるもの。出家を

ねがふ。衆僧これを。佛に白。佛言く。不能男に五種あり。みな

法を得る器ならず。出家を許すべからず。といへり。又石女なる

もの。尼寺に入て。出家をねがふ。諸尼衆これを。僧中に白す。

衆僧是を佛に白す。佛曰。これを不能女といふ。法をうる器なら

す。出家をゆるすべからずといへり。此中男子は慧相應の器なり

男子戒滿足すれば。聖慧をうるなり。女人は定相應の器なり。女

人戒滿足すれば。聖定を得るなり。定慧は元來不二なれども。入

にちかき處あるなり。是を道をつたふる器なりといふなり。佛在

世に。男女二形あるもの。出家をねがふ。是も佛ゆるしたまはぬ

なり。此等は道器にあらすといへり。漸次に道を全せば。賢聖の地位にも入べしとは。男子慧をうれば。必定相應して無漏大道を得。女人定相應すればかならず。慧相應して。無漏大道をうるなり

一切男子みな。妻あるべし。一切女人ことゝく夫あるべし。此夫妻あれば。夫妻の道あり。是をこの戒の相とす。夫妻ありて父子あり。父子ありて。兄弟あり。親族姓氏あり。是を人倫とす。天帝釋の命を下す。輪王の諸王にをしふる。この人倫の道なり

此一段上をうけて。人倫の要を。のふるなり

一切男子みな。妻あるべし云云とは。人倫の道なり

この欲界の中。上天より。下蟲蟻にいたるまで。此男女雌雄の。愛まぬかれぬなり。此中天上はその道自然にそなはる。禽獸は道を教べき。器ならず。唯この人界教へは。上天にも通すべく。誤れば禽獸に。落べしといへり

此夫妻あれば。夫妻の道あり。云云とは。正く不邪婬戒の。たつ所以なり。夫妻ありて云云とは。律に刼初は。人みな化生にして男女上下の別なし。後世人五穀を食して。男女の形わかれ。男女わかれてのち。婬事ざして。父子。兄弟。姉妹。親族ありと云り。世間善惡ありて。君臣上下の。別出來といへり。易序卦傳に有天地然後有万物有万物然後有男女有男女然後有父子有父子然後有君臣有君臣然後有上下有上下然後禮義有所錯夫婦之道不可以不久といへり

天帝釋の命を下すとは。經中に天帝釋は。三十三天の主なり。日月星宿は。其文臣なり。四天王等は。その武官なりといへり。人

間の善惡。上天に通して。天帝釋の命あり。日月諸天等。これをうけて。下土を照臨し。その禍福定りありといへり

輪王の諸王に。をしふる。この人倫の道なりとは。輪は摧破運轉の義なり。王は梵言に羅闍。自在の義なり。惡邪を摧破し。善政を運轉し。國土人民に於て。自在をうる。これ輪王の義なり。金輪王は。十善を以て。粟散諸王に。をしへて。是を庶民におよぼすといへり

若世外に超過して。佛種を紹隆するものは。これ等類ならず。別に童眞清淨の行あり。賢聖沙門の安住する。那含諸天の快樂する。此清淨の行なり

此一段上に因て。不婬戒の趣を示なり

若世外に超過して云云とは。欲界地居人中。この男女の欲最勝なり。此中道に順すれは。神祇の守あり。子孫長久にして。多福をうく。道にそむけば。冥に神祇いかり。子孫にいたるまで。其災をうく。是を人道とす。大聖世尊。出家清淨行を。教たまふは。この人倫を超過するの道なり。人倫を超過するもの。人倫の師たるべし。超こゆると訓ず。過すぐると訓ず。この人倫の外に出て佛家に生在すべし。是を佛種を紹隆すといふ。紹つぐと訓ず。字書に繼也。續也。といへり。隆さかんと訓ず。字書に盛也豐也大也高也といへり

別に童眞清淨の行ありとは。玄應法師音義に。天竺にては八歳以上。能女人を遠ざけ。一切婬事にふれざるを。童眞といふといへり

賢聖沙門の安住するとは。賢は妙善の義。賢位に。十住。十行。

十回向。の位ありといへり。聖は出垢の義。無垢の義なり。聖位に十地ありといへり。安住すとは。諸〳〵の三賢十聖の人。因緣あれば。在家にて。菩薩の行を。おこのふことあれども。本意は沙門の行にあり。故に安住といふ

那含は梵言なり。此には不還といふなり。是は欲界の欲を離れてふたゝび欲界にかへらぬといふ義なり

此那含の居する。天位に五あり。五那含天といふ。是を那含諸天といふなり。快こゝろよしと訓す。樂たのしむと訓ず

清淨行とは。此行世に異なり。幼年より婬事なきものは。心相一途による。此一途の心相を以て法を憶念すれば。此法身心と相應すること。適中せるくすりの。病を療することく。好絹の染色をうくるかことし。この法滿身に相應して。聖域も遠からぬなり

法身心と相應して。初て佛弟子と稱すべし。世間汚濁の趣に異なれば。清淨行といふなり

人たる道の中に。男子は剛正を本とす。制を人にほどこす。妻ありて妄あるも妨なし。女子は柔順をまもる。制を他にうく。両夫に見ゆるは。道にそむくなり

此一段男女戒相の別をのぶるなり

其條目のごときは。他國は他國の禮あり。我邦は我邦の禮あり。其國にゐて其禮をまもるは。道のあるところなり。若我邦に居て。他土の禮をいざのふ者は。愚の甚しきなり

此一段國土の緣起を。のふるなり

法性平等なれども。緣に隨て。彼あり此あり。己に彼此あれば。相混ずへからず。爰に於て。土地の饒瘠風水の清濁わかれ。人物

の志性言音みな同からぬなり。道もその土地と人物とに。したがひて。別々にあらはるゝなり。故に其國の禮度を主とすといへり例をあげば。支那には同姓を娶らずといへり。餘國にはその例すくなし。支那には男子三十を壯といふ。娶る。女子は二十にて嫁すといへり。餘國はその制なし。支那には。姉妹夫を共にすることあり。堯の時よりしかり。餘國はあるひは。是を賤しむる類なり

佛戒は此等類ならず。法性より。等流し來て。萬國古今を救度す。たとひ。夷狄にゆくも。たがふべからざるの道なり。萬々世の後もまもるべきの法なり

此一段佛戒の尊尚をいふなり。佛法の中に。佛を三界の大導師と稱す。この道万國古今にをし通すといへり

夷狄二字共に。えびすと訓ず。外國の稱なり。俗典に東夷西戎南蠻北狄といふ。佛法には。通して邊國といふ。梵語は茂戾車なり

男女の會遇宿緣さだまり來て。現緣成就するは。人倫のつねなり。もし父母親族のゆるさぬ。もし他家に屬せる等には。たがいに心をよすまゞさなり

此一段通ゞて。邪婬戒の義を標するなり

男女の會遇云云とは。男女緣事佛經にも。おほし。俗書歷史韻府の類にも多し

若父母親族のゆるさぬ云云とは。瑜伽論に父護母護等といへり。

總して。女人は他に護らるべき者といへり

若六親の中に不淨行をなすは。禽獸の行なり。惡業障を成す。經律の文に。この亂行あるものは。五戒等の善律儀をうくるに。堪ずと

説り

此一段增上邪婬の相なり

六親とは。善見毘婆沙に。父親者。伯叔兄弟兒孫母親とは。舅姨兄弟兒孫といへり。南山大師云。皆謂同氣義親不雜異姓と此中伯叔とは。父の伯叔なり。已に於ては。伯叔祖なり。兄弟とは。父の兄弟なり。已に於ては伯叔なり。姉妹はこれに準ず。兒とは。父の子なり。已に於ては兄弟なり。孫とは。父の孫なり。已に於ては。姪男姪女なり。但し是は親里の義なり。戒障となることは別義あるべし

經律の文とは。受五戒の法則に。初に五逆の有無を問竟て。次に於六親中不行不淨行否と問なり

如上の非法ならす。其さだまりたる。夫妻の中にも。非支非處非度

みな邪婬の相なり。具には經律論等の文をたづねて。そのをもむきをしるべし

此一段この戒護持の細相なり

如上の非法ならずとは。上の二段の非儀をは。なるゝなり

其定りたる。夫妻の中にも云云とは。閨門の守りなり

善見論第七法師曰此不淨法語諸聞說者勿驚怪生慚愧心志心於佛何以故如來慈愍我等佛是世間王離於愛染得清淨處爲愍我等說此惡言爲結戒故又觀如來功德便無嫌心若佛不說此事我等云何得知波羅夷罪有笑者驅出といへり。宋朝靈芝大師の言に。世間愚人誰能反照身行鄙穢殊ニ不省非及聞教說反生驚怪汝必惡聞何如不作汝既ニ自作何得惡聞此由不知格大慈門說毘尼藏全是指出衆生惡業若能知業豈復有教嗚呼尼愚迷倒至此といへり。此婬戒の相輕躁なる者は。た

はれたることとくおもふなり。正知見の者は。信受奉行して。現に天命にかなひ。人道を全し。無漏聖道の縁となるなり

非支とは。亦非道と名づく。大乘三戒經云在家菩薩若男若女不犯非道といへり

非處とは。居處道にそむくなり。男女會遇。その處を。をらぶへしといへり

非時とは。智度論第十三に若自有妻受戒有娠乳兒といへり

非度とは。限量法を。うしなふなり。此等の義今畧す。別に明すべし

能此戒をまもる者は。禮度うちに定りて。德澤はかに溢る。人のしらざる處。神祇の守護あり。天の明命をうく。妻妾妬忌なく。家に繼嗣斷ぜず。孝子順孫の風ながくつたはり。親族和し。長幼序あり

此一段護持の功を明すなり

能この戒を守るものとは。有志德行の人を指なり。禮度うちに定とは。閨門みたれなきなり。爰に閨門正といふも。宋朝の儒生か。妻子に。對すること嚴客に對するごとくといふ類にはあらず。妻子は妻子。嚴客は嚴客。その趣は同かるまじきなり。唯非支。非處。非時。非度。等の守を失はぬを要とするなり

德澤外に溢るとは。此閨門正き人は。万事漸次に正く。德行成就して。分に隨て。恩澤をほどこすなり

人のしらざる處。神祇の守護ありとは。淵鑑類函に。明の王華か邪婬を避て後壯元及第せる類なり。淺近の事蹟。一時の謹愼もその德むなしからぬなり

佛說の非支非處等。更らに深義あるべきを。信すべし

天の明命をうくとは。凡天命は上に定て。下に施すなり。此上に定には。必ず人事の得失によるなり。たとへば地氣上て。雨となるが如きなり。此男女は陰陽の姿。剛柔の性なれば。天命の相應する。猶もつゝしむべきなり。佛說に非支非時非處非度の制あるは。人類を憐愍したもふの深なり

是を國に用れば。國政みだれず。天下も平なり。乃至欲に在て清淨なるは。觀音菩薩の三摩地門なり

此一段上をうけて。廣く功德の增長をのぶるなり觀音菩薩の三摩地門なりとは。理趣經にその義あり

第四不妄語

語言文字皆法性の。あらはるゝ姿なり。善根の衆生分に此德を受得て。人間界に生ず。音生の言語正しからぬ。啞の舌根不便なる皆業障なり。密教の中金剛語菩薩あり。諸佛說法の德を掌る。此戒の義。おもふてしるべし

道の口門にある其趣ふかし。聲韻法爾にして。その始終をいふべからす。文字無盡にして。その涯際をゝがたし

此一段言語の本義をのへて端を發ずるなり。道の口門に在とは。此道もひとり立べきにあらず。必衆生に託し。身口によりて起るなり。今此戒は口門の道なれば。道の口門にあるといふなり。門とは。古人可通入爲門と釋せり。此口より。聖道に入べきなれば門といふなり

其趣ふかしとは。稱嘆のことばなり

聲韻法爾にしてその始終をいふべからずとは。聲は字書に有氣斯有聲故云聲氣聲成文爲音故云聲音韻は說文に和也音諧也單出爲

聲成文爲音音員爲韻といへり

法爾とは。自然といふがごとし。法として爾るべきを法爾といへり

文字無盡にして。その涯際をもかたしとは。是は梵義に就て。のぶる辭なり。文字の梵語阿乞叉羅といふ。阿は無の義なり。乞叉羅は。盡の義なり。此文字法として。無盡の義あれば。梵語に阿乞叉羅といふなり

涯際字書に涯水際也。際邊也。畔也。といへり

此人界の耳根明了なる。言音を以て法をつたへ。文辭を以て。道をつらぬくといへり

この一段上をうけて。是を人中に歸するなり。耳根明了なるとはこの界は六根の中に。耳根明了なる處なりといへり

言音を以て法をつたへとは世尊、此人界にては。言音を以て法を說玉ふなり。今の一切經これなり

文辭を以て道をつらぬくとは。李漢か。集昌黎文序に文者貫道之器也といへり

現今に明歷々なるもの。天地。神祇。山川。草木。こと〳〵く。誠のあらはれし姿なり。此身詐僞なく。この心詐僞なし。是を眞實語といふ。いにしへに。六大みな響ありといふは。此眞實語の德なり

此一段上をうけて。眞實語の趣を明せるなり。現とは。過去をよび。未來を畧して。今を明すなり

明歷々たるとは。見てしるべく。聞てしるべきなり

天地神祇山川草木云云とは。天象萬古變せざる。地の物を發生する。みな誠の相とす。經中に諸天に詐僞なしといへり。神祇の類

八部みな妄語なしといへり。山川草木みなその眞實の德あり。華嚴經に皆神靈ありと云り。具に世主妙嚴品の中のごとし

此身詐僞なくとは。五根のしる處みな。眞實なり。眼の青黃を見る。眞實にして僞ならず。耳の聲をきく。皆實のごとくなり。鼻舌身も同ドきなり

此心詐僞なしとは。心に善惡邪正を。分別ずるみな眞實なり。心のごとくに。言を發すれば眞實ならざることなし。更に深義あるべし

是を眞實語といふとは。結文なり。古に六大みな響ありとは。弘法大師のことばなり。聲字義の頌云五大皆有響十界具言語六塵悉文字法身是實相といへり。六大とは。地水火風空識なり。今五大と六塵と二句をとり。取意して引なり

唯業障ふかきもの。妄想に。おほはされ。自己の私に役使せられ。わづか両三人を。あざむかんとして。天地神祇の冥助を。うしなひ自性の功德をも。損減する。是を妄語といふなり

此一段犯罪の趣を。あらはすなり

業障ふかき者とは。妄語の法罪。惡下劣の人に相應するなり。も し功德具足せる。人は自ら妄語なき。經中に轉輪王と及その太子は。妄語なしといへり。佛と聖弟子は。妄語なしといへり。妄想におほはされとは。鏡のくもれるごとし。水の濁るごとく。自性の明を失なり。もし心相に邪智なければ。自ら妄語なきなり

自己の私に役使せられとは。名をいつはり。利を求る情あるなり

その心公なる者は。をのづから。妄語なきとしるべし

わづか両三人を欺んとして。天地神祇の冥助をうしなひとは。神

祇は誠に感ずる者なり。虐詐を惡むといへり。智度論十三に。妄語之人先自誑身然後誑人以實爲虛以虛爲實虛實顚倒不受善法譬如覆瓶水不得入妄語之人心無慚閉塞天道涅槃之門といへり

此中大妄語あり。小妄語あり。德義をいつはるを。大妄語と名づく

實ならずして。我禪定をえたり。解脫を得たり。天來り。龍きたり鬼神來て我を供養すといふなり

この一段戒相を。あらはす中。大妄語の相なり。小妄語あり。梵網の法藏疏等をみるべし

德義をいつはるを云云とは。重罪の趣なり。實ならずして。我禪定を得たり云云とは。四分律の文なり

よのつねの僞を小妄語と名づく。見しことを見すといひ。見ざりしことを。見しといひ。耻べき罪惡を覆藏し。眼をかくして。その人を友とする類なり。若これに由て。他の命を害すれば。殺生の罪をかぬ。自己の利をまねけば。偸盜をかぬる等準ずしるべし

此一段戒相をあらはす。中小妄語の相なり

よのつねの僞をとは。小妄語の義を。釋するなり

見しことをみずといひ。見ざりことを。みしと云とは。梵網經の文なり

耻へき罪惡を覆藏しとは。是も律文なり

恨をかくして。其人を友とする類なりとは。論語を引て例し示なり。論語に巧言令色足恭左丘明耻之丘亦耻之匿怨而友其人左丘明耻之丘亦耻之といへり。若これによりて。といふより下は兼罪を明せり

他の命を害すれば。殺生の罪をかぬとは。左傳に華督殺か。孔殺

嘉を讒せし類なり

自己の利をまねけば偷盗をかぬるとは。唐書に蕭太后が我民間の弟を尋しとき。外人がみづから。其人と稱して。皇后を欺し類なり。餘の綺語惡口等をかぬる。邪婬を兼る等もあるべし。故に等準し知へしといふなり

元來三業二途なし。身あるひは。口業をつくり。或は意業をつくる心。あるひは口業をつくり。或は身業をつくる。此戒口門のみならず。身の妄語あり。心の妄語あり

此一段妄語は語業口門の罪なれども。意業身業にわたることをあらはす。梵網經に身心妄語といへり

身の妄語とは。位ひきゝ者の。高貴の儀をなす。内はづる事あるにしひて平常の顏をつくる類なり

此一段身業の妄語を明すなり

心の妄語とは。みづからかく有へしと。おもい定しことを。後みだりに。あらたむるたぐひなり。佛神に誓しことは。さらに慎まもるべきなり。是も非を知てあらため。或は劣を捨て勝に順するは。違犯ならず。佛神の感應も。むなしかるまじきなり

此一段心の。妄語の差排を。あらはすなり

能この戒をまもる者は。言語此德あり。ことを知るこの罪あることをしる。おもふことと云へく。いふこと行ふべく。二六時中みづから欺かず。他をあざむかず　又他の欺をうけず。人主は此德を全して恩を海内にほどこす。若世天神仙は。呪術を造作して。よく人民の厄をすくひ。その希願を滿ず。若賢聖菩薩は旋陀羅尼を成就して。字義句義を具足す。此眞實語不思議なり。觀誦すれは無明をのぞく

といへり。乃至法に自在を得て。三界の大導師となる。

此一段持戒の相を明して結するなり

能この戒をまもる者とは。謹慎奉持の人を指なり。言語この德あることを知る云云とは。戒法より。實智慧を生ずるなり。智度論に詳なり。此德とは。文字德あり。言音德あり。佛經明咒陀羅尼外典詩歌に至るまで。その德あるべきなり。此罪とは。妄語綺語等の罪なり。智度論十三に乃至廣說せり。をのづから智慧を得て此等の事に明なるなり

おもふことと云へく云云とは。持戒の德を示すなり。論語に君子名之必可言也。言之必可行也と。今爰に標するは。其文似たれとも。その意は別なり。人主は此德を全して。恩を海内にほどこすとは。人君の民庶に異なるを標す

若世天神仙は。咒術を造作して云云とは。天仙の人類に異なるを標す。四分律の序に。神仙五通人造設於咒術といへり。曲女城の緣事に。この中に引へし

若賢聖菩薩は云云とは。賢聖の凡位に異なることを標す。旋陀羅尼とは。法門の名なり。此法門は一字の中に無量の法を解し。無量の法をのべて。是を一字に歸する等なり。智論に陀羅尼秦言能持或云能遮といへり

字義句義を具足すとは。眞言の法字義あり。句義あり。深祕の法には。字義句義ともに。具足すと云へり

この眞實語不思議なり。觀誦すれば。無明をのぞくとは。一行阿闍梨字母表の中の偈なり。智度論五に。有小陀羅尼。如轉輪聖王仙人等。所得聞持陀羅尼分別衆生陀羅尼歸命救護不捨陀羅尼如是

等。小陀羅尼餘人亦有是無礙陀羅尼外道聲聞辟支佛新學菩薩皆悉不得唯無量福德智慧大力諸菩薩獨有是陀羅尼といへり

法得自在とは。語言門は。法に屬するなり。釋迦如來眞言於法自在如虛空といへり

三界の大導師とは。佛世尊の異名なり。此中說法の德に就て標するなり。大論五十七に過去諸佛學是大明咒當得阿耨多羅三藐三菩提當來諸佛學是大明咒當得阿耨多羅三藐三菩提今現在諸佛學是大明咒得阿耨多羅三藐三菩提といへり

第五不綺語

濁世の人間日々に澆薄に走る。阿含經に綺語の世間にあらはるゝ人壽減少の時にありといへり。此綺語は言音の德をそこのふ。經陀羅尼を。誦して功驗のなき皆此によるといへり。智度論第五に天人龍阿脩羅等及一切天人皆信受其語是不綺語報といへり。又曰是魔有三事戲笑語言歌舞邪視如是從愛生云云

道は古今泯せず。理は事にふれて。壅塞なし

此一行道の大體を說いだすなり

道は古今泯せずとは。山の高。海の廣。むかしも今も同しきなり日月の東に出て。西に沒するむかし今の差別なきなり。大道の古今へたてなき思て知べし。世に一類の者ありて。道に古今の別ありといふは。或は愚昧にして。自暴自棄すかあるひは。小根なる者を廣く誘ふ思ひありて。言出すことばなり。實を以ていはゞ。大道は古今の別なく。萬國に通して。國家人民を利益する道なり若古今別あらは。徑路といふへし。大道といふべからす。万國に通せすは。小道たるべし。大道にはあなず

理は事にふれて。壅塞なしとは。一切世間その事ある處は。必す理を具足して。とゞこほらぬなり。泯字書に云盡也　雍字書に塞也

故に有道の士は。二六時中其樂ありて。至處に隨逐す。いにしへに南風のかほれる。我民の慍をとくべしといふは。在位の儀なり。肱をまげて枕とするも。樂ありと云は。布衣の志なり。樹下に結跏し月下に經行し。禪定智慧相應するは。出世道の趣なり

この一段發端の二句を。うけて此戒の義趣を。あらはすなり

有道の士云云とは。世上賢聖の志なり。有道士みちある人を訓すべし。凡士の字は。出家在家に道するなり。比丘を乞士と翻するにてしるべし

二六時中は。晝夜六時なり。その樂とは。道理の樂なり。至處とは。富貴。貧賤。出家。在家。等。いづれに在ても。壅塞なきなり。隨逐とは。影の形にしたがふ。ごとくなるを。いふなり

古南風のかほれる云云とは。上をうけて。事例を引なり。禮記に曰〻舜彈二五絃之琴一而歌二南風一詩二南風之歌曰南風之薰兮可以解吾民之慍兮南風之時兮可以阜吾民之財兮

肱をまげて枕とするもとは。論語に飯蔬食飲水曲肱而枕之樂亦在其中矣不義而富且貴於我如浮雲といへり

樹下に結跏し云云とは。出家人の樂をいふなり。佛在世に迦維羅衛の。賢王出家して。快樂と唱る類なり。結跏とは。佛の坐法なり。佛弟子たるものは。是をまなぶべきなり。智度論第七に。若結跏趺座身安入三昧威德人敬仰如日照天下除睡眠覆心身輕不疲懈覺悟亦輕便安坐如龍蟠見畜跏趺坐魔王亦愁怖何況入道人安坐不傾

動といへり。月下に經行とは。佛法の中經行の法なり

唯凡庸の徒。この樂を外にして。別に戲謔をこのむ。世に謂ゆる。かるくち。さるかふこと。非時の言論。鄙媟の文辭みなこの戒の制なり

此一段上をうけて。戒相を示すなり

唯凡庸の徒とは。能犯の人を擧るなり。此樂を外にして。別に戲謔をこのむとは。犯戒の心を出すなり。世に謂ゆる。かる口さるかふことは。犯戒の相なり

諸戒尊尚なる中に。此法尤いちじるし。唯大人のみ其德を全すべし

此一段この戒の大人相應なることを。示すなり。周の成王の周公旦の諫をうけて。一生戲なき類なり

此戒亦身口に。わたる故に。律中に身口綺戒と名づく。近世の誹諧發句。狂詩。情詩。の類みな。綺語に攝すべし。男子なるもの。女人の裝をなす。女人なるもの。男子の儀をなす。此國に在て。外夷の風をならふ。出家人にして。在家の威儀をまねぶ。皆身綺に攝すべし。非類の衣服。非儀の形相みな。作まじきなり

此一段雜して。犯戒の種類を示すなり。十二卷の中に詳なり

うたひ物のたぐひ。國の禮式にもちひ。來るは綺語と名づくべきにあらず。一切戲弄にわたる。うたひ物には。心をよすべからず

此一段種類の中。うたひものを擇なり

近世輕躁なる者。衆をいざなふ思ひ有て。道を戲論に寓するおほし此輩みな法の賊なり。をよそ民のうれへは。淳厚をうしなひて。薄情に走にあり。たゞ此道のみありて。其邪曲をふせぐべし。もし道を戲論にまどふれば。此道また利口となる。利口の邦家をくつがへ

す。君子にくむといへり。經中に乳もし毒を雜すれば。醍醐に至て
も。人を害すと說り

此一段上をうけて。似て非なる者を。ゑらぶなり

近世云云とは。此弊むかしはなきことを。あらはすなり

輕躁なるものとは。德量なきなり。此輩出家にも。在家にもある
なり

衆を誘とは。法を賣のおもひ。切なるなり

道を戲論に寓すとは。儒者の道あるひは。佛道を。世間田夫紅女
のうたひもの。或は口ずさみによするなり。寓字書寄也又托也

利口の邦家を。くつがへす。君子にくむと云りとは。論語に惡紫
之奪朱也。惡鄭聲之亂雅樂也。惡利口之覆邦家者。經中に云云乳、
とは。天竺國に牛乳をとり用ゆ。醍醐とは良藥なり。彼國人乳を
製して。酥となし。酥を製して。酪となし。酪を製して。醍醐味
となすなり。若乳に毒を入れは。乃至醍醐も人を害す。此喩をも
て。法に凡意を加ふまじきことを示すなり

樂器は金石絲竹等みな。心をよずるに咎なし。風をうつし。俗を易
るは樂より善はなしといへり。又樂をつくりて。天に應ずともいへ
り。その中大樂は必す易なり。大禮はかなはす。簡なり。操もし煩
細なれば淫聲にちかし。近世の三弦ときふ等は。大人の。弄べきな
らず

此一段種類の中に樂器をゑらぶなり

風をうつし俗を易るとは。禮記の樂記に。樂者聖人之所樂而可以
善民心其感人深其風移俗易故先王著其教焉といへり。又曰移風易
俗天下皆寧故曰樂者樂也と

又樂をつくりて云云とは。樂記に樂者熟和率神而從天禮者辨宜居鬼而從地故聖人作樂以應天作禮以配地禮樂明備天地宜矣と云り

大樂は必す易なり云云とは。禮記樂記に。樂由中出禮自外作樂由中出故靜禮自外作故文大樂必易大禮必簡といへり。操字書云風調曰操又琴曲也

詩歌はその妙處に至ては。道の助となるべし。古より天地をうごかし。鬼神を感ぜしむといへり。風雲に想をよせて。高逸の氣象をうつし出し。花鳥に情を寓して。道の幽遠をのぶる等なり。此中にもことば。華麗をこのみ。情僞飾にわたるは。綺語に攝すべし

此一段種類の中。詩歌をえらぶなり

詩歌はその妙處に云云とは。標出なり。いにしへより。天地をうごかし。鬼神を感ぜしむと。いへりとは。詩の小序の文なり

風雲に想をよせて云云とは。此二句その趣を學るなり。此外さらに義趣あるべし

此中にも云云とは。非義をえらぶなり

その要は人々つゝしみ守て。淳厚の德をそうしなはざるにあり。世に謂ゆる。伶利俊邁博學文才もろ〳〵の。風雅の類。みな末か末なり

この一段通ゝて上を結ふ文なり

伶利は支那の俗語なり。事にさときなり。俊とはとしと訓ず。邁とはすぐると訓ず。博學はひろく學たる人なり。文才は和漢の文才ある人なり。風雅詩經よりとり來る。鄙俗ならぬをいふなり

能この戒をまもる者は。世に處して。他のあなどりすくなし。日夜に人しらぬ樂あり。山中にすめば山岳の興あり。海邊に居れば。滄海のをもむきをしる。古人も仁者山をこのむ。智者水をたのしむと

いへり

此一段世間持戒の德をのぶるなり

古人も云とは。論語に智者樂水仁者樂山智者動仁者靜智者樂仁者壽といへり

菩薩の境界に至ては。德雲比丘妙峯の別峯に等虛空界の佛身を見海雲比丘海門國の渡頭に普眼契經をきくなり

此一段出世持戒の德をのぶるなり。華嚴入法界品に出たり。此中深意あるべし。大疏鈔等を見るべし

契經經文には。法門といふ。明慧上人の涅槃講式に普眼契經といへり。今これをもちゆ。契經といふも。法門といふも。義は同ト きなり。契はかなふと訓ず。佛經は理にかなひ。機にかなふ。故に總ゝて。契經といふなり

德雲比丘云云とは。入法界品に善男子於此南方有一國土名爲勝樂其國有山名曰妙峰於彼山中有一比丘名曰德雲汝可往問菩薩云何學菩薩行云何脩菩薩行乃至菩薩云何於普賢行疾得圓滿德雲比丘當爲汝說乃至時德雲比丘告善財言善男子我得自在決定解力常念一切諸佛捻持一切諸佛正法常見一切諸佛於東方見一佛乃至十佛百千佛乃至不可說不可說佛刹微塵數佛如東方南西北方四維上下亦復如是等といへり

海雲比丘云云上は同云善男子南方有國名云海門彼有比丘名爲海雲汝往彼問乃至云海門彼有比丘名爲海雲汝往彼問乃至海雲比丘告善財言善男子我住此海門國十有二年常以大海爲其境界所謂思惟大海廣大無等我作是念時大蓮花出現彼華上有如來結跏趺坐即申右手摩我頂爲我演說普眼法門開示一切如來境界

等

第六不惡口

柔輭語は。人中の德なり。惡害の聲は。畜類の業なり。智度論二十六云。復次苦切語有二五種一二者但綺語二二者惡口亦綺語三二者惡口亦綺語妄語四二者惡口亦綺語妄語兩舌五二者無煩惱心苦切語爲教二弟子分一別善不善法一故拔衆生於苦難地故

此戒は謹愼の德柔順の功なり

此一句戒の趣をしめすなり

謹愼は爾雅注疏の字なり。例を擧ば漢萬石君が類なり

柔順とは。老子のをもむきなり。老子云專二氣致一柔能嬰兒乎と。又云柔勝二剛弱一勝と

盲人をめしひとのりと。をろかなる者を。愚人とのる類。此の戒の制

なり

此一段戒の相を示すなり

物を見たかへしを。盲とのり。聲をきゝたかへしを。聾と罵たくひを。增上の犯とす

此一段犯戒增上の相をしめすなり

若人を畜生に比し。智ある者。德ある者を。罵詈するは。更におそるべきなり。經論の中に口より斧を出し。其身をやぶり。その國をほろぼすと說り

此一段犯戒極增上の相を示すなり

口より斧を出し云云とは。雜阿含經に。士夫生二世間一斧在二口中一生還自斬二其身一と。四分律に共相誹謗罵詈口如二刀劍一といへり

能此戒をまもる者は。顏色つねに和す。音聲つねに和す。小兒をも

あなどらす。畜生をものらす。言辭上分をとらす。威儀麁獷ならす
たま〳〵苦言呵責あるは。その人を憐愍するのふかきなり
此一段持戒の相を示すなり
顏色つねに和す。音聲つねに和すとは。智度論第五に嗔恚本拔嫉
妬除故常脩大慈大悲大喜大捨故四種邪語斷故得顏色和悅といへ
り
小兒をもあなどらすとは。說苑に孔子の家兒不知詈曾子家兒不
知打といへり
畜生をものらすとは。四分律に云畜生聞毀慚愧況於人云云
言辭上分をとらすとは。教誡儀に云若有所言語須謙下不得取上
分と
威儀麁獷ならずとは。大論に善輭人求道欲度諸衆生といへり

たま〳〵苦言呵責あるは。その人を憐愍するのふかきなりとは。
同論二十六離欲人無有垢心嗔罵何況佛といへり。律の因緣に無
比童女容貌端麗なり。その父婿をゑらふ。世尊の尊倘なるを見て
無比女をひきゐ來て。侍せしめんと白す。無比女も世尊の相好を
みて。身心熱惱す。世尊曰汝醜陋臭穢の身。足指を觸るにたらす
と。父婆羅門。これを聞て嗔恚を含て去る。諸弟子世尊に白す。
何故に惡罵し玉ふと。世尊答云彼女人欲意熾盛なり。我もし輭語
せば。彼熱血を吐て死すへしと云云
能他の諫言をいる。童謠をもその趣を察す。柔よく剛を制すること
をしる。元龍の悔あることをしる。事は先人を稱すこの中。祖宗の
德を。我身につたへて。是を兒孫にのこす。功は他人に歸す。此中
衆美を具足して。天命なかく存す。守てつねに守れは。修身災害な

此一段持戒の功を示すなり

よく他の諫言をいるとは。心相柔輭の德なり童謠をもその趣を察すとは。よく他を用るの趣なり。列子に堯微服遊康衢童兒謠曰立我蒸民莫匪爾極不識不知順帝之則といへり。已下は。心相廣明の德なり

柔よく剛を制することをしるとは。事理に達するなり。老子經に云天下至弱莫過於水而堅强者莫之能勝以其無以易之也文元龍の悔あることをしるとは。易乾卦に上九元龍有悔といへり。文言傳云元之爲言也知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪と

事は先人を稱す云云とは。古今の道をしるなり

功は他人に歸す云云とは。自他へたてなきなり。守て常に守れは終身災害なしとは。上を結ぶなり

此戒善生生の處に隨逐して。戰鬪亂亡のうれへなし。口過なかく絶して。言辭雄亮なり。乃至梵音清揚一切諸機にとほるの德を成就すべし

此一段持戒の德をしめすなり

梵音清揚とは。世尊六十四種。梵音の德を具し給といへり。諸機に透とは。諸羅漢舍利弗も。人機をたがふることあり。唯佛世尊よく。衆生の機に。とほること。大海潮の時をたがへさる如といへり

第七不両舌

天地も和合の儀なり。人倫も和合のすがたなり。正法の中に。衆

和合を僧の德とす。言語の此道に違するを。両舌といふなり。此道を守て自他ともに。親好なるを不両舌といふなり

友愛親好のこゝろ。彼此和合の儀を。此戒のをもむきとす

此一行は發端のことばなり

をよそ事々物々みな。相應する邊に成立し。違反する邊に壞滅す。水よく舟をうかべ。亦舟をくつがへす。藥よく病を療し。亦身命を害す。万般ことゝくしかなり。是をこの戒持犯の儀とす

此一段上の發端をうけてその趣を示すなり

他の言をかしこにつたへ。此許に傳て。その親好を破る是を両舌といふ。諸惡の中に此惡尤いやし。小人鄙女にをほきことなり

此一段犯戒の鄙劣を出して。反して戒法の尊尚を示すなり

能此戒をまもる者は。天地の儀をもしり。治亂の數をもはきまへ。陰陽のをもむき。万物の情にも達すへし。君臣へたてなきこと。一體のごとく。四海相したしむこと。一家のごとし

此一段世間持戒の德を示すなり

天地の儀をも知とは。易老子の意なり。老子の文に天乃道。道乃久といへり。同云飄風不終朝驟雨不終日孰爲此者天地云云

同云天地相合以降甘露民莫之令而自均文易の一書は全天地の義なり

治亂の數をもわきまへとは。阿含經の意なり。人事下に成して。天數上に定る。刧初十善具足して。人壽八萬歳なり。刧來十惡具足して。饑饉疾疫刀兵あり。其なか一善かくるごとに人壽漸減し一惡生するごとに。世界漸麁澁なりと云り。此類推て知るべし

陰陽の趣とは易なり。一陰上に位するを。姤といふ。一陽下に。

生するを復といふ。坤下乾上を否と云。上下隔て天地ふさがる。乾下坤上を泰と名づく。君臣相和して。萬物交泰なる類なり。萬物の情にも達すへしとは。馬に乘もの馬の情に達せされは。誠にのりうることあたはす。牛をつかふ者。牛の情をゑて。牛をなれしむへしといへり。民間田夫父老の言に。牛をつかふもの。大抵十五六歳より牛をつかひ。田を耕す。三十餘に至て。初て牛の情を得。この者田を耕すに。牛勞せすして。田土とゝなひ。畦畔齊整にして。矩度にあたるといへり。莊子の庖丁か牛をさく。輪扁か輪を斷もその理なり。十善の人主万民の情に達して。四海みな賢聖の風たるべし

遠くは眞正の道に達して。凡聖二ならす。迷悟へたてなし。一切世間の治生産業とゝく。取用て我實相智印となす。一切天魔外道みな攝し來て。大眷屬内眷屬となす

此一段出世間持戒の德をしめすなり

一切世間の治生産業とは。法華經に一切治生産業不與實相違背といへり。治生産業とは。世人民庶の作業なり。内眷屬大眷屬とは。法中にしばらく。文殊普賢等を。大眷屬とす。迦葉阿難等を内眷屬とす。智度論をみるべし

華嚴の中に。依正たがひに攝し。法華の中に。本跡融會す。その經名を受持するも。福不可量なりと云り

此一段両經を引て。上の持戒の德を證するなり

依報とは。世界國土なり。草木等も同し。正報とは有情の身心なり。眼耳鼻舌身意等も同し。華嚴の法門の高座より。菩薩現じ。毛孔に國土をあらはすといへり

本門とは。久遠成道の佛なり。跡門とは。王宮誕生。迦耶成道の佛なり。法華の法門本門ある處として。跡を現ぜざるなく。跡門のある處かならず。これ本門のあるところなり

第八不貪欲

分外の事を求るを貪欲といふ。前戒の盜戒は。財利を制し。婬戒を制す。みな非理の欲を禁ずるなり。此戒は心相に約す。たとひ非理ならぬも。内心に分をこゆれは。みな此戒を破するなり

法至てあきらかなり。唯自らおほはさるゝ者みつからくらますのみ天覆ひていとはす。地載て功とせす。その貪欲瞋恚あるは。たゝ人の私なるのみ。邪智妄想あるは。その私の長せるのみ。日つねに照して。みつからその恩をしらず。水つねにうるほして。自ら德とせす。世に煩惑うすき者あらは。道の尊尚なることをしるべし

此一段發端のをもむきなり

法至て明なりとは。此一句不貪欲の體をあらはし出すなり

たゝ自らおほはるゝ者。みつから。くらますのみとは。迷をあげて比對し。法の當相を。明了ならしむることばなり

天覆ていとはす。地載て功とせすとは。天地も亦不貪欲の體相なることを示せるなり

邪智妄想あるは。その私の長せるのみとは。迷人貪欲の相貌を示せるなり

日つねに照して。みつからその恩をしらす。水つねにうるほして自ら德とせすとは。日と水とを擧けて。万物の本體みな。不貪欲の體相なることを示すなり

世に煩惑うすき者あらはとは。即上の私と。私の長せることを省

る人なり。煩はわづらはしと訓す。惑はまどひと訓す

道の尊尚なることをしるべしとは。此人ありて。此道を知のをも

むきなり

賢聖平常の心業。これを名つけて戒とす。人の道として。善をこの

み惡をにくむ。その惡をにくむも甚しきは亂の端なり。是より下な

る者は。事ごとに美惡をえらぶ大にして。山川聚落。小にして。器

物翫具。そのえらびたくみなる者は。貧窮の兆なり。人の容貌。人

の才藝みなすきて。擇は災の根なり。但大人のみありて。其をる處

に安んし。そのそなはれる分をたのしむ。才によりて任し。時にし

たがひて隱顯す。是をこの戒の儀とす

此一段上をうけて。此戒の儀をしめすなり

賢聖平常の心業。これを名つけて。戒とすとは。この一句戒の趣

を示せるなり。上に道の尊尚といふは。即この戒の義なり。凡戒

法は別に安排布置して。建立せるにあらず。私なき人の心。即こ

れ戒なれはかくいふなり

人の道として。善をこのみ惡をにくむ。その惡を憎む甚しきは。

亂の端なりとは。過不及の過を指示すなり。過不及の中。此戒は

すくるを制するなり。善をこのむも人道のあるところなり。惡を

にくむも。人道のあるところなり。此惡をにくむも。甚しきに至

れば。事を亂すなり。論語に人而不仁疾之已甚亂也といへり

是より下なるものは。事ことに美惡をえらぶとは。庸流の心相を

示すなり。大にして山川聚落。小にして。器物翫具云云とは。事

例をあくるなり。大と小とを擧て。一切を通し示すなり。美惡を

えらぶは。一往のえらひは。許す可なり。過失にいたらす。此擇

増上すれば。その中に巧を得る。爰にいたれば。過失生ずるなり
今貧窮を擧れども。餘の過失あるべきなり
人の容貌。人の才藝みなすきて。擇は災の根なりとは。此中古今
その類多かるへし。事例を引用すべし。その中甚きものは。唐玄
宗時教坊有二王大娘者一善戴二百尺竿一竿上施二木山一狀二瀛州方丈一令小
兒持二絳節一出二入其間一歌舞不輟と。此類みな國をほろぼすなり
唯大人のみ有てとは。持戒の儀則なり。此法尊尚にして。庸流の
境界ならぬ。故に大人のみといふなり
その居處に安んしとは。居處階位等に。不貪欲なる儀なり。山川
聚落都鄙。いづれの所にても。自らたり。安んして。外にもとめ
なきなり。事例を擧ば漢の張良が留侯に封せられば。足りといふ類
なり。韓信か齊の假王とならんと請しは。身を亡すの媒なり

其そなはれる分を。樂むとは。俸祿等翫具等に。不貪欲なる儀な
り。事例を擧は漢文帝の臺を造ることを。止し類なり。隋の煬帝
の迷樓をつくる等は。亡國のきざしなり
才によりて任ドとは。大にもあれ。小にもあれ。主人たるもの。
自らその分に明なれば。亦他をみること明なり。他をみること。
あきらかなれは。人を使にその才の長せるところを用るなり。事
例をあげば。漢の高祖の三傑を用ゆる類なり
時に隨て隱顯すとは。みづからその分に明なる者は時の宜に達す
るなり。時の不可なるを知て。かくる時の可なるを見て。あらは
る。孟子に孔子は。聖の時なる者なりと。いひし類なり。是をと
の戒の儀とすとは。上を結ぶことばなり
現今目前の森羅萬象。みな過去世につくりなせし。業相の影なり。

面目おなしく。そなはれども。智愚の別ある脩養ひとしけれとも。壽夭の異なる。形の好と醜と。資財の足と不足と。おなし世とも思はれぬあり。或は言行まもりある者。その身凍餓し。賢をねたみ。能を害するもの。一生富榮なるあり。大抵は業印。印ドきたりて。寸毫をたがへざるなり

この一段緣起の相を示すなり

現今目前云云とは。指示してさらに。貪求すべからざることを明すなり。たとへば。夢は今日思想の影なり。思想によりて。あらはるれども。夢のうちには。實あるかごとし

面目おなしくそなはれとも。智愚の別あるとは。已下列示して。影像の轉ずべからざるを明すなり。初には一期の賢不肖。さたまりたるをのべて。外に貪求するを。やめしむることばなり

脩養ひとしけれとも。壽夭の異なるとは。脩養とは。養生術をつくすなり。壽は莊子に上壽は百年。中壽は八十。下壽は六十といへり。夭とはわかゝになり

形の好と醜と。資財の足と不足とおなし。世とも思はれぬありとは。現に人のことく〳〵。みるところによりて。事の趣を示すなり

或は言行まもりあるもの。その身凍餓しとは。善人の現福あるへきもの。却て幸なきを擧るなり。賢をねたみ。能を害する者。一生富榮なるありとは。惡人の福あるへきもの。反て幸なるをいふなり。大抵は業印印し來て寸毫をたがへさるなりとは。上を結ふことばなり

此中影を逐のあやまりたることをしる者は。そのみちわか身心の中

にそなはる。影を捉るのまよひたることを。知ものは。世外に出頭して。自由の分あるなり

此一段上の縁起をうけて。持戒の相を示すなり

二喩をあけて。法の德をあらはす。初の喩は世間わが智惠にほこりて。餘人を見くたす。わが富榮にほこりて。貧窮なる者を、蔑にする。たとへば影を逐かことし。此智惠し業のかげとしり。この富榮し業のかげと達すれば。自ら他をあなとる心なきなり。他をあなとる心なければ。法德自ら成立すといへり。後の喩は他をあなとらねども。わか智惠わか富榮なとは。執着すれば影を捉んとするかことし。此迷だになければ。智者は智者。愚者は愚者。貴人は貴人。賤者は賤者。をのつから其中に解脫するなり。その義趣おもふべし

世に一類底下の者あり。富榮をうらやみ。貧賤をうれへ。是により て身心を勞し。または資財を衰損す。あるひは身の樂をほしひまゝにし。心の欲をたくましくし。自ら災害をまねき。または壽命を減少す。あるひは濕にふし風を侵し。みつから病を發して。諂を鬼神になす。あるひは孝養つとめす。忠義はけまずして。福縁を佛菩薩に請す。或は非分に官職をもとめ。壽命をいのり。眷屬をいのり。財利をもとめ。日夜つねに蒼々として。終に朽敗に歸す。經中に是を憐むへき。衆生と名つくるなり

此一段犯戒の相をしめすなり

世に一類底下の者ありとは。犯人を標出するなり

富榮をうらやみ云云とは。此犯人まとひまとふを列示す

經中に是を隣へき衆生と名つくるとは。上を結ふことばなり。大

日經に異生羝羊心なと丶云類なり

此中あやまり解して。神祇功なく。求請驗なしといふことなかれ。その私なき者は。必す神明の冥助をうく。又君父のためにいのり。國家のために求請する等。その理あるへきなり。此業なる者も。そのむかしの業の影にして。元來實體なけれは。大善根をつみて。惡業を轉するも。その理なしといふへからす。古に誠ある者ひさし。久ければしるしありをいへり。又現在に惡業を重れば。必す宿世の善根を滅す。是も理のつねなり。善をつみて。神明の加護をこひ。罪惡を懺悔して。佛菩薩に歸投するは。たとへは渡に船を得ることく。又蓮花の日光をうけて。開敷することきなり

此一段上を受て。護持の志を示すなり

神祇功なく。求請しるしなしといふことなかれとは。傳戒誡勗の

言なり。世の事に滯るものは。多は神になれ鬼にへつらふ。理學に志す者は。多は神祇を蔑にし。佛菩薩を輕するなり。此二途みな偏見なり。今爰には一途をあくるなり。其わたくしなき者は等とは。正見を提示す。然に神祇にいのり。佛菩薩に求請ずるに。其しるし有無はかりかたし。大抵は私の遲き者誠なきもの。思慮おほき者は。佛菩薩神祇の納受なきなり。又事の成就は遲速あり大小ありて。肉眼の定むへきにあらす。たゝ其人にして。其道を知へし

又君父の等とは。求請の道なり。自身のため。妻子等のために。祈るは多は私に屬するなり

此業なる者は等とは。善惡とも轉ずべきをいふ。渡に船をうる等とは。經の文なり

能このすを守るものは。十分の名に居らす。もし名稱その實にすくれは。德をかくして。拙をあらはす。十分の安に居らす。若榮曜滿足すれば。儉をまもりて。みづから裁抑す。その家に生て家の分を守る。其國に在て國のかぎりを知る。此分にして此分たる。今日にして今日足る。此たることを知ものは。つねに富といへり。たとひ貧賤憂戚のなかにも。今世の樂をもとめず。後世の榮をねがはず。作こと唯善事なり。作てやまされは。この身善法となる。是非得失の中にも。天をも怨みず。人をもとがめず。をもふこと唯正法なり おもふて。更におもへば。此心正念相應す

此一段持戒の功をしめすなり

よく此戒を守るものとは。能持の人を標す

十分の名に居らずとは。名の實德を害することを知なり。實德あ

りて。その名あるすら好さることなり

若名稱實に過るは。災をまねく媒なり。尙も愼むへきといへり

十分の安に居らすとは。安逸の德を害するを知れり。古に宴安は鴆毒といへり

若榮曜滿足す云云とは。是は尙もつゝしむへきなり。榮曜滿すれは。或は命を減ず。德をも減すといへり。謙を守れば害すくなきといふことなり。此義は古書にもあるべし

其家に生れて。その家の分を守る云云とは。これは不貪欲の心を明す。遺教經に知足者雖貧常富といへり。老子經に知足立足常足矣といへり

たとい貧賤憂戚の中にも云云とは。經中に願今世樂者名欲願後世樂者名大欲といへり

なすこと唯善事なり。作て止されは。この身善法となるとは。元來身心不二なり。事理不二なり。事は理をそなへて。相違なけれは。善事正理と相應す。身は心のことくあらはるれは。善事滿足すれは。この身たゝちに善法なり

是非得失の中にも。天をもうらみず。人をもとがめずとは。論語に天をも怨みず。人をも尤めず。下學して上達すといへり

おもふこと唯正法なりとは。法をおもへば。此心正法となる。此正法念を引て。正念相續するなり。經に蛇行常曲若容之竹筒

則直行凡夫念想必邪曲容之禪定則正念といへり

回顧して世界を視る。一切世界こと〳〵く幻のことく。空谷の響のことく。旋火輪のことし。乃至諸佛の清淨身を得。一切時。一切處もろ〳〵の衆生に應同して。起滅邊際不可得なり

此一段持戒の德をしめすなり

回顧して世界をみるとは。持戒の人の世に居る趣なり

幻のことくは。經中に具に十喩あり。今三喩を擧るなり。幻とは幻術に精き者よく山河人物をあらはすといへり。是は旦く目にみゆれとも。實體なきなり

空谷の響とは。こたまなり。相應する聲あるに似たれとも。その實體なきなり

旋火輪は火を旋して。輪相現するなり。その輪相あるに似たれとも。實に輪相にあらす

諸佛清淨身とは。現今人間は。肉血を以て身とす。汚穢なり。諸佛は法を以て身とす。是を清淨身と名つく。不貪欲の法清淨なれは。佛身此中より現するなり

一切時一切處云々は。大日經の文なり。佛身衆生に應同するの德なり。三世に通して止ことなきを一切時といふ。十方に通して隔なきを一切處といふ。大悲萬行衆生に。應同して法身つねに寂靜なるを。起不可得といふ。常寂光土に居して。身心動作なけれども。有緣の衆生とこしなへに。利益を得るを滅不可得といふ。此起滅菩薩聲聞の。はかるべきならねば。邊際不可得といふなり

第九不嗔恚

凡嗔恚は憂惱より生す。憂惱は宿福の闕失なり。故に宿善の人は慈悲相應し嗔恚すくなし。業障ふかき者。憂惱も多く。嗔恚增長するなり

華嚴經等に一念嗔恚の火。無量劫の功德法財を燒亡すと說り

此一段聖文を引て。端を發するなり。智度論にも。嗔爲毒之根。

嗔滅一切善といへり

世のまどひふかき者は。一朝の忿にその身を忘て。その親に及すなり。失心狂亂し性命をも損するなり。此類みな此戒增上の違犯なり

此一段世のありさまを擧て犯相を示すなり

世の惑ふかき者は云々とは。論語に一朝之忿忘其身以及其親

非惑與といへり

失心狂亂し性命をも損するなりとは。法苑珠林に。含毒腑臟鴆裂其心といへり

三界夢裡の境。その業相の似よりたるもの。同世に出てをなしき國土に生す。四海みな兄弟なりと云も。虛言にはあらず

此一段緣起の相をのべて。親好の趣を示すなり。三界夢裡の境とは。總して標するなり

其業相の似よりたる者云云とは。緣起の相を云なり。禪定の業相は同く。色無色界に生す。散善の業相は。欲界の中に人天の生をうく。欲界の中此人中にある。人中のなかおなしき國土に生す。正眼に看來は。懸隔ならさるなり

四海みな兄弟なりとは。論語に君子敬而無失與人恭而有禮四海之內皆兄弟也といへり

此等の趣俗書を引用すといへとも其義同からざるなり

緣來り會過す。緣去て離散す。順緣に相したしみ。違緣に相そむく世相かくのことし。今新に出來にあらす。或は我恩惠をほとこすに他却て損害をはかる。此許に仁慈を懷に。彼怨讎をふくむ類ことく〳〵く。業力轉變の相なり。吾心をわつらはすにたらす。若いかれは我罪となる。動れは累刼の障碍なり。聖教の中に我うらみ止されは。彼うらみ盡ことなく。我いつくしみ深けれは。彼うらみよりところなしといへり

此一段順逆ならへ說て。聖教の意をのぶるなり。緣來て會過す云云とは。通して世相を出すなり。或ひは我恩惠をほとこすに。他かへつて損害をはかるとは。阿闍世王等の。緣事此中に引示すべし。孟子に大王幽に居る。狄人これを侵す等も同條なり

此許に仁慈をおもふに。彼怨讎をふくむ類とは。陀羅尼雜集經の中に。末世に至て。父母慈愛あるは。其子怨讎をふくむといへり

又弟子其師に於て誹謗すといへり。是より甚しきは。子として父母を弑する等なり。聖教の中とは。四分律の文なり

古人怨にむくふるに。德を以てすといふは。天の道なり。此道の中蘭蕙も。荊棘もひとしく。長育して隔なく。麟鳳も豺狼も共に容て

害せぬなり。直を以て怨にむくひ。無を以て德に報といふは。人の道なり。此道の中聖賢を尊重して。讒佞を遠さけ。荊棘を刈去て。嘉苗を種殖するなり。此天道ある處は人望こゝに歸す。この人道全處は天命爰に應す。一無價の寶珠を縱さまに見。横さまにみるがごとし。智人は時にしたがひ。用て左右その源にあふなり

此一段人道天道を並へ學て不嗔恚の德をのふるなり

古人怨にむくふるに。德を以て云云とは。天道を示すなり四分律四十三に以怨除怨仇怨仇終不除無怨怨自息其法勇健樂といへり。老子に爲無爲事無事味無味大小多少報怨以德と云ふ。世人おほく老子をしる故に。古人と標せり。凡此等の文は。老子も佛法に順するなり

直を以て怨にむくひ云云とは。人道を示すなり。論語に或曰以德報怨何如子曰何以報德以直報德以德報德といへり

此天道あるところは人望こゝに歸す。云云とは。上の二道をならへむすふなり

能この戒をまもる者は。世緣を攝取して。勝義諦をあらはす。其利衰毀譽ましはり。來もたゝ緣の向背をみる。莞爾として世間に居す富貴なるも可なり。貧賤なるもまた可なり。生々の處に內心憂戚なし。內にその德あれば。外相も是にもたがふ。容貌端嚴なりといへり。乃至三十二相。八十隨好十身相海の身をうべし

此一段持戒の功。持戒の德をしめすなり

能此戒をまもる者はとは。能持の人を標するなり

世緣とは世中もろ〳〵の緣事なり

勝義諦とは。世間の聖法なり。諸法の實相一切有無等の戲論を。

はなるれは勝義といふ。この勝義眞實なれは。諦といふ。諦とは實の義なり

其利衰毀譽ましはり。來もたゝ緣の向背をみるとは。僧祇律の偈に。利衰及毀譽稱識若苦樂脩環若回轉といへり

莞爾として世間に居す云云とは。智人の趣なり。莞爾は字書に笑貌といへり

生々の處に內心憂戚なしとは。內心に瞋恚なけれは。つねに歡喜と相應するなり

內にその德あれは。外相もこれにしたがふとは。內外元來不二なれは。貌とは心のすがたなることをいふなり

容貌端麗なりといへりとは。四分律に。佛末利夫人に答へ玉ふ。大事にもいからす。小事にもいからす。瞋恚すくなきものは。生

々容貌美なりといへり

三十二相とは。足下平滿等總して。佛身三十二の相具したまふなり。八十隨好とは。無見頂等總して佛身に。此隨好ありといへり

十身相海とは。華嚴に出たり。佛甚深無盡の相好を。具したまふをいへり

第十不邪見

邪見とは有無の二見なり。此二見は正道にそむけは。邪見と名つくるなり。不邪見とは。甚深なるへきなれとも。我分齊の及はぬ處は。別にその道理あるへきと信するを。聖智見に入もとゝとするなり。世人の邪見を發するは。自心力の及はぬ處を思ひはかる故なり。臨濟錄に若正智見をうれは。生死におゐて自在を得といへり

日夜代謝すれとも。春はなさき。秋實のる式は万古たかはす。念々滅し去て。蹤跡をとゝめねとも。一類相續して。業相任持すること は。實に三世にわたるなり。近は此一期の中にも。於てまとひなきは。少壯勤學の功による。臨末にも心みたれさるは。平生脩善のちからなり。智者一隅を以て。三隅を例せは。甚深緣起にも。その淨信を生すへし

此一段はしめに。現今しりやすき處を以て。正法の趣を比對しあらはすなり

日夜代謝すれとも云云とは。天地四時その規則幽遠なれとも。目前にみる處にて。測知へし。念々滅し去て云云とは。心相の古今異ならぬことを示すなり。此心相甚深なれとも。人々知へき趣を以て。不邪見を示すなり。程伊川か四箴に。心兮本虛應物無迹といひしは。此一分を推察せるなれとも。此心迹なしとはいはれぬなり。小兒のときよみならひし。大學庭訓も一生もちゆへきなり

一類相續とは。現今人間一生智愚の性緩急の性みなうつらぬなり佛知見の中には。三世にわたりて。緣起不思議なり。婆沙論に是相似相續と名つく。唯識の頌に。恒轉如暴流といふ。又意識常現起五識隨緣現といふなり

業相任持これは。諸道の中たゝ。佛法内にいふところなり

近くはこの一期の中にも云云とは。是は二類の現緣を以て。上の業相任持を。比對し示すなり。此中且く現業の例をあげば。淵鑑類函に唐貞元中孝生爲深州錄事參軍雅爲大守所知時王武俊師成德軍其子士眞至深洲大守大貝酒士眞索嘉賓同召李生士眞叱

左右縛繫獄李生曰聞佛氏有現世之報吾知之矣前遇一少年負巨囊吾利其資排之崔下得緡百餘段凡二十七年矣昨視王公之貌乃曩時所殺少年也斬其首以進士眞孰視而笑曰李生無罪但我一見之遂忿然欲殺之吾亦不知其所以然也密訊其年則政二十有七智者一隅と以て。三隅を例せはとは。論語に學一隅不以三隅反則不復也といへり。この文をかりて。法の信をひらくなり

此戒の違犯は世智辨聰の者。をのか伎倆により。肉眼のみる處にて法を思量す。あるひは天地の間さたまれる道なし。衆作者の手を經て。その道成立せりといふ。或は天地常理ありて。古今泯せす。もろ〳〵の博才なる者。その一分をとり用てをのか道を說といふ

此一段をしなへての邪見を示すなり

世智辨聰とは。經中に八難を說り。三惡趣世智辨聰二佛の中間等は。正法に障りふかけれは。これを難處とするなり

天地の間さたまれる道なし云云とは。是は近代一儒生の見なり。此人大儒なり文章に巧なり。その說面白し。但し眞理には遠きなり

或は天地常理ありて。古今泯せすとは。是はその人をさためかたし。儒者の中篤實なるもの丶見處をしつられて學るなり。宋代の程子朱子なとは。是に似たれとも。是よりは下なり

其中佛菩薩賢聖なし。神祇なし。善惡報應もなしと。おもふ類は。すへて斷見に屬す

此一段別して斷見を示すなり

其中佛なしとは。有人云古今を別事なし。万國も別事なし。たとひ天竺國なりとも。金色光明の人あるへき事ならすと。有人云釋

迦は人妖といふものなり。人中にたまさか有へきことなり。有人云釋迦も在世には。有智の人なるべし。今の世には滅後二千餘年なれば。其德も感應もあるまじきなりし。是等無佛の見なり菩薩なしとは。一類の者云。菩薩とは佛教のなか。大根機の人なるへし。普賢文殊觀音勢至のたくひなり。是も滅後數千歳なれは今の世に感應あるへきならずと

賢聖なしとは。一類のもの云。聖人といふは。作者の名なり。賢人といふは。述者の名なり。むかし聰明なる。人民ために。利あることをはしめ。害あることを除きたるを作者といふなり。論語に作者七人。古書に作者これを聖といふ等なり。別に人に異なる人あるへきにあらす。彼作者聖人の道をつたふる者を。賢者述者といふ。格別に一樣別體の賢者あるにあらす。竹林の七賢なとゝいふて。今も屏風障子に畫くも。一樣風雅の酒徒なり。別體なる人間にはあらすと。此類をして知へし

神祇なしとは。一類の者いふ。五行を立て。五行の神をとく。万物を開て万物の靈を示す。みな其德を敬ふ儀なり。五穀の神靈を祭てうけもちの神。伊勢外宮太神宮と崇る類なり。又有德の君民の忘れぬ處に。宮社を設て。歸敬のところとなす。伊勢内宮加茂八幡等なり。又明臣智臣。しも勇憤の士まて。凡民のをもふ處みな。神社の設あり。春日香取北野等なり。別に神といふ物ありて幣串のほとりに居て。人の祈をきくにあらすと

善惡報應もなしとは。宋代の朱子程子已下。これ等の見おほし。今記するに及はす

すへて斷見に屬すとは。上を結ふことばなり

淫祠を信し。邪説に友なひ。僞經を受持し。妖僧巫祝の欺をうけ。此世の名利をねがひ。後世の樂を求る類は。みな常見に屬するなり

此一段別して常見をなすなり

淫祠を信しとは。諸方の愚昧なるもの。衆人に誘れてはやり神。はやり觀音。はやり地藏等を信する類なり

邪説に友なひとは。今時僧徒の類。巫祝の類に世を惑す者おほし其説俗にちかければ。愚昧の者。おほくしたがふなり。大要は大聖世尊末世のために。經論律藏をのこして。有志の者の明鑑となし玉ふなれば。經律論の説に違するは。邪説の類なるへし。又祈禱ことの奇怪。臨終の奇端なと。世におほく邪説をましへたり。智者をらぶへきなり

僞經を受持しとは。此僞經に二樣あり。一は世智辨聰のもの。自己の伎倆によりて。僞經を作り出し。世の人を惑すなり。一は愚昧の者。或は夢に感し。或は妄想によりて。佛菩薩神祇の告あるに似て。思ひうかべたることはあり。血盆經十句觀音經の類なりすへて。僞經は文も短く理もちかく。又その功德を。をほさやうに説出せは。庸人はをほくなびき受持するなり

妖僧巫祝の欺をうけて。今時種々あり。一類は野狐なとの妖通をかり用て。暗夜に愚昧の者を誑すあり。是等の類晝日は。日光の威にをそれて。妖通なし。又刀劒をもをそるゝなり。暗夜密室にいさなひ。若は刀劒いむものあらば。此類と知るべし。或は病人なとを。急に日をかきりて平癒せしむるあり。是は病人の平癒せるにあらす。彼病人は志性昧劣なる者なれば。彼虚をうかゝひて野狐樣のものをつけて。其に動作せしむるなり。傍人の目には病

人の氣力を得たる樣なれとも。實は病人なをも。精氣を奪れて。苦むとなりといへり。是等を妖僧巫祝の欺といふなり

此世の名利をねがひ云云とは。此世も業の影なり。後世もまた。此世の業のかげなり。影にして影をもとむる皆愚といふへし。みな常見に屬するとは。上を結ふことばなり

此中の持戒は佛あることを信し。正道理あることを信し。賢聖あることを信し。神祇あることを信し。善惡報應もむなしからぬことを信する是なり

此一段畧して。持戒の相を示すなり

佛あることを信しとは。正知見の中に佛あるなり。佛とはむかしの智者なり。此智ある人よく道の邪正をゑらび。邪をすて正に歸し。次第に正道をゑたり。此正道に德ありて。諸の煩惱無明をのそき。諸善功德を滿せり。此功德消失るものならねば。なかく現存して。諸の衆生を利益す。聖はます〳〵聖にして。終に極果無上尊にいたる。これを佛と名づくるなり。此佛緣あれば世にあらはれ。緣つくれはかくれたまふあり。隱といへとも。無に歸するにはあらす。信ある處に應すること。月の萬水に影をうつすことくなり。正道理あることを信しとは。此正道理といふは。正法なり。此正法は佛の師なり。この道ありて。よく諸佛を生するなり要をとりていはゝ。正道理に全く相應せる人を佛と名つく。佛心の趣を正道理と名づくるなり。聖あることを信しとは。賢は妙善の義なり。聖賢無垢の義。出苦の義なり。正道理をまなふ。人次第に其心妙善なるを賢と名つく。此賢位の人次第に。妙善の德を增長して。その心きよく身心に苦惱をはなるゝを聖といふ。此

二佛に比すれは。いまだ極果にいたらねとも。其れ尊重すへきなり。世間に天地あれは。人に智愚あるべし。世間に晝夜あれは。人に凡聖あるべし。我愚昧なれはとて。外に智人あるましとおもふは惑なり。我凡位なるを以て。外に賢聖なしとおもふは。愚のいたりなり

神祇あることを信しとは。正知見の中には神祇あるなり。凡物あれは能あり。能あれば德あり。世間事物の中樂器は工匠の手より出來る物なれとも。其妙物は必すその德そなはるなり。刀劒は鍛冶かてより。造立せる物なれとも。其逸物にいたりては。其德あるなり。まして山川聚落は廣大なる物なれは。必す神靈あるなり地水火風は。さらに廣大なれば。四大神その一いちしるしきなり五穀は人民を利する功大なれば。必す神靈あるなり。天はさらに尊尚なれは。天神その德あり。日月星辰みな其神靈あり。有德の君。有功の臣みな神靈あるべし。具には餘所にしることし

善惡報應も空しからぬことを。信するこれなりとは。この善惡報應ちかくは。天の命なり。遠くは。法性の緣起なり。易に積善の家には。餘慶ありといふ。其義おもふべし。古語に隱德あるものは。必す陽報ありといふも同し義なり。此等の趣を推察して。三世にわたるを。正知見といふなり

道は智愚にあらす。智愚ともに道に入へし。法は古今にあらす。古今ともに法を得べし。如上の信增上すれば。心相調柔にして。諸の諂曲なし。たとひ無佛世界に生するも。邪智邪見發せず。有情に對して。慈悲を生し。財色に對して。義理をしるこの心相續すれば。天命にも達すへきなり

此一段持戒の德をあらはす中。初に世間相應の分齊を示すなり
道は智愚にあらす。云云とは此二句通して。標出するなり。世中
の智愚はみな。情欲の分齊にて業の影なり。大道は此情欲を離れ
たり。智愚を以て名つくへきならす。故に道は智愚にあらすとい
ふ
智愚とも に道に入へしとは。世の智あるものみつから業の影とし
れは。此智正智となる。世の愚なる者。みつから業の影なること
を信すれは。此愚蹤跡なし。大道は智者も入へし。舍利弗。迦葉
等の類なり。愚者も入へし。槃特及諸の摩呵羅の類なり
法は古今にあらすとは。此古今年月も業相の影なり。たとへは一
夕の夢に年をふるがことし。正法は。此夢中の差排ならねは。古
今にあらすといふなり

古今とも に法を得へしとは。業相夢中の迷なけれは。一切時法を
うへきなり
如上の信增長すれは云云とは。上をうけ戒德を標するなり。即是
不邪見の相これを如上の信といふ。增長とは漸次に深に入の儀な
り
心相調柔とは。總して邪見の心は麁獷なるものなり。自ら是とし
他を非とし。理にもとり。事にひかむ。是に反して正見の心は調
柔なるなり。諸の諂曲なしとは。邪見の人諂あり。曲あり。正知
見の人は是に反するなり
たとひ無佛世界に生するも。邪智邪見發せすとは。支那國土の賢
人聖人といふものゝ類なり。佛法東流せぬ已前にも。惡邪見は發
せぬなり。古より鬼神を崇敬し。山川を祭るみな。正知見の教に

同しきなり

有情に對して慈悲を生しとは。鄭子産か生る魚を得し時その從者に命して。水中に放たしめたる類なり

財色に對して云云とは。范蠡か越を退きし類財に對して義理を知るなり。晉文公か南威をしりぞけし類。色に對して義理をしるなり

此心相續すれは。天命にも達すへきなりとは。論語に顔淵か願無代レ善無施レ勞と云し。老子に聖人常善救レ人故無二棄人一常善救レ物故無二棄物一と云。此類みな天命をいふのことばなり。遇異か功、をあらそはざる。叔孫敖か封を惡地にうくる。此類天命をしるのをもむきなり

若正法にあへは。此身心業の影なることをしる。知は必す執着をはなる。人我の相なかく絶して。法無我を得。聖域も遠かるまゝきなり。いはゆる聖域とは。從來の面目をあらためて。金色光明をはなつを云にあらす。詩書に通し。禮度に達し。萍實まて辨明するをいふにあらす。博才文章なるも可なり。一文不通なるもまた可なり。通邑大都に在も可なり。山林幽谷に居るも可なり。其自知する處。他の見聞すへきにあらす

此一段ひろく持戒の德をあらはす中。後に出世間相應をしめすなり

若正法にあへば云云とは。上をうけて法の利益ふかきをしめす

此身心業の影なることを知とは。正知見を標出するなり

しれは必す執着をはなるとは。正知見の功。世の執着なきなり。

夢中みつから。夢としるものは夢中に迷すくなし。方にまどふ者

みづから迷としれは。其まとひ久からぬことくなり。此世界に居てみづから。業の影としれは必す惡執深迷なし

人我の相なかく絶して云云とは。自心に執を起を人我といふ。境界に執を起を法我といふ。自己に執着なけれは。一切法に執着をはなる。たとへば。草木の根を斷すれば。枝葉自然に枯かことくなり

聖域にも遠かるましきなりとは。佛法の中人無我に達するは。小乘の聖なり。かねて法無我に達するは。大乘の聖位なり

謂ゆる聖域云云とは。金剛經に三十二相を以て。佛をみるべからすといへり

詩書に通し云云とは。上は佛の三十二相を引て。相によらぬことをあらはし。是は儒中孔子の事實を引て。智惠にもよらぬことを

あらはすなり。萍實とは孔子家語に出たり。楚王萍實を得る。國にしるものなし。使をつかはして。是を孔子に問。孔子云これ萍實なり。其味甘しと

博才文章なるも可なり。一文不通なるもまた可なりとは。智愚ともに。法にいるへきをいふなり

通邑大都にあるも云云とは。大抵は深山幽谷に道を脩する。雪山道士隱山の類。貴べきなれとも。强て此にもかゝはらぬなり

その自知する所。他の見聞すへきにあらすとは。法の名貌しかたきをいふなり

菩薩種なる者は。その宿緣おほくは。人民の主たり。福智ひとしく脩し自他ともに利益す。或は善知識にあひ。或は內鑑明了にして。法の邪正を知り。事の眞僞を辨す。上のこのむ處。下必すしたがふ

率土みな邪をすて。詐僞をさけて。その眞正にもとづく

此一段別して大人の德をあらはす

菩薩種なる者云云とは。經に菩薩戒を受るもの。おほく人主の報をうくといへり。又初地の菩薩多くは。人中の主となり。第二地の菩薩多くは。天中の君となるといへり

福智ひとしく脩し。自他ともに利益すとは。王者の善を脩する。民庶に異なるなり。梁僧傳に宋文帝曰弟子常欲持齋不殺迫以身徇物不獲從志法師既不遠万里來化此國將何以教之跋摩曰。夫道在心不在事。法由己非由人。且帝王與匹夫所脩各異。匹夫身賤名劣。言令不威若不尅己苦躬將何爲用。帝王以四海爲家。万民爲子。出一嘉言則士女咸悅。布一善政則人神以和。刑不夭命。役無勞力則使風雨適時寒暖應節百穀滋繁。桑麻鬱茂如此持齋

亦大矣。不殺亦衆矣。寧在闕半日之餐全一禽之命。然後方弘濟耶。

といへり或は善知識にあふとは。王者德あれは。菩薩羅漢おほくその國中に生をうけて。世の福緣となり玉ふといへり

或は內鑑明了云云とは。大人の德多は。民庶に異なるなり

下必すしたかふとは。論語に君子の德は風なり。小人の德は草なり。草は必す風にのべふすといへり

眞正法ちからあり。未來際をつくして。諸〳〵の苦因をはなる。乃至諸佛の智惠光明。この戒の中より現するなり

此一段法力をのへて終をむすふなり

眞正法ちからありとは。世間の中に業力最勝なり。智者も免ることなく。勇者もかつことあたはぬなり。唯法力のみありて。よく彼業を摧く。故に力ありといふなり

未來際をつくして。諸の苦因をはなるとは。業よく苦をまねく。故にれを苦因と云なり。苦因なかく絶すれは。苦縁も隨て滅するなり

乃至諸佛の智惠光明。この戒の中より現すとは此不邪見戒は。諸戒を統取して。一切功德を具す

智惠光明とは。般若波羅密の義なり。智度論等にひろくとけり

（以上十戒竟）

上來畧して。信受の功を記す。其戒相のひろきは。大小乘經論の文のごとし

此一段總して上をむすふなり。一大藏經の中。部だちたる經論にはみな此十善を明せり。故に大小乘經論の文の如しといふなり。

凡戒法といふより已下。法滅の相なりといふまては。戒法開遮のをもむきなり。文ひろければ。更に段落を分てみるへし

凡戒法は持犯開遮の品異にして。一途ならす

此一行標出なり

持とは法に隨順して。そむかぬなり

犯といふは。わたくしに隨順して。違背するなり

開とはゆるすと訓す。此法通して塞らす。時にしたがひ。處にしたがひて。開通あるなり

遮とはさへぎると訓ず。此法開通ありといへども。惡業をさへきりて。許さゝるなり

しばらく一二の例を擧は。優婆塞律儀に五戒を制す。妄語に次で。飲酒戒をたて。綺語惡口兩舌を畧す。この十善は口四。つぶさに說て飲酒の制なし

此一段上を受て十善と。五戒の差別を標しあらはすなり。優婆塞は梵語なり。此には近事といふ。三寶に親近し。つかふまつる義なり

律儀とは。戒體をいふなり。此優婆塞戒體ありて。優婆塞の德を成す。これを優婆塞律儀といふなり

五戒とは。殺生。偷盜。邪婬。妄語。飲酒の制なり

優波婆沙律儀に。八戒を制す。高廣大床等を立て、意地の三戒を畧す

此一段十善と。八齊戒との差別を表し。あらはすなり

優波婆沙とは。梵語なり。此には近住といふ。三寶に親近し。住するなり。住とは事といふよりふかきなり。前の近事は第三の戒不邪婬なれは。夫婦同居人倫にそむかずして三寶に事るなり。此近住は第三の戒不婬なれば。清淨行を以て。親近し住するなり。律儀は戒體なり。近住の人此律儀ありて。近住の德を成す。これを優波婆沙律儀と云なり

八戒とは前の五戒の外に。不坐高廣大床と不得香油塗身歌舞作樂故往觀聽と。不非時食となり

從上の賢聖この解あり。五戒は出離の道に順す。本をあげて末を攝し。妄語の中に餘の三戒。ことゞくそなはる。飲酒は放逸の門をひらけは。少分もゆるさざるなり。十善は人たる道をあらはす。本末別に開て口業に四戒をたつ。飲酒は世間にありて。あるひは禮式に用ゆ。親族のまゝはり。慶賀なとに。禮度みだれざる。分齊はその制ならず。もしは强飲をこのみ。若は終日酒宴して夜にをよび。終夜にして曉にいたり。もしは醉臥して。常度をたがふ等は。不貪

欲戒の制なり

此一段十善と五戒の差別を釋しあらはすなり

從上の賢聖この解ありとは。傳戒相承かみ大迦葉より。天竺の諸聖。支那の大德。我邦の諸德。つたへ來る趣を。今のべあらはす故に。初に此解ありといふなり

五戒は出離の道に順すとは。十善に對していふ。十善は佛法の中人民を救度し。此人をして人たらしむる法なり。世間出世間に通するなり。五戒はこの人を導て。此生死世界を出て。涅槃妙界にいたる緣を。さづくるなり。故に出離の道に順すと云なり

本をあげて末を攝しとは。本とは不妄語なり。末とは不綺語不惡口不両舌なり。眞實語は質直なれば。此中に綺語なし。眞實語は麁獷なければこの中に惡口なし。眞實語は和順なれば。此中に両

舌なし。故に餘の三を。ことゝく攝ずるなり

飲酒は世間にありて。或は禮式に用ゆとは。この一戒は上の四重を護する邊にたつ。故に優婆塞戒に制する

八齋戒は日を局し。夜をかぎりて。分に出家の行に順し。たゝ法を以て樂とす。絲竹みな禁し。見聞とゝに犯なり。此十善は世をおさめ。民をすくふ。尊貴に處する道にして。獨善逸居の趣にあらず。このゆへに淫聲を禁して雅樂を開し。見聞を許して。自作を制するなり。香油塗身非時食高廣大床等みな準し知へし

此一段十善と。八齋戒の別を釋しあらはすなり

日を局し夜を限とは。五戒十善は必す盡形壽の戒なり。是を年月の限りにうくるは。開通の邊なり。八齋戒は一日一夜の戒なり。有信の貴賤この日に。清淨行出離の道を脩するなり。これを盡形

壽等にうくるは。深行の邊なり

身口の七支は外を守て内を正す。城を高し壍を深して。外敵を拒ごとし。意業の三支は内より外に及す。南面垂拱して。四夷賓服するがごとし。彼中には貪を盗に攝し。嗔を殺に攝す。己に生死のおそるべきを知り。正法の信ずへきに達し。身七衆の中に居すれは。不邪見は所論ならさるなり。此中には良家も。頑民も。漏さずして。化育す。德を後代にしき。命を海外につたふ。外に殺を禁して。内もまた嗔をやめしめ。世の盗賊を罰して。通人にも貪欲の耻へきを知しむ。身に非威儀をはなれ。心相もまた淨信に住せしめ。深山のおく。浦々のはてまでみな。淳善賢聖の風ならしむるはり。元來二法なけれども。主とするところ別なりといへり

此一段七支十支の差別を。釋しあらはすなり。身口の七支とは。

身三口四なり。三支とは意三なり。支は支分の義なり

南面とは人主の位をいふなり。垂拱とは人主の容貌をかたどるなり

七衆とは比丘。比丘尼。式叉摩那。沙彌。沙彌尼。を五衆といふ是に優婆塞優婆夷を加へて七衆といふなり

又經中に在家の菩薩。或は五戒の句を受持す。時方に隨順して。自在に攝受し。舞伎等種々の藝處を示現し。衆生を攝取す。謂ゆる四重禁と不邪見戒なりといへり。是は綺語惡口兩舌のごときは。出没時にしたがふ趣なり

此一段大日經を引て。開通の義をあらはすなり。方便學處品の文なり。此中出家人は必す十善を全すべきなれは。在家の菩薩といふなり

時とは時の宜を知なり。方とは處の相應をしるなり。自在とは偏局ならざるなり

佛在世に般遮翼か琉璃琴を彈して。跋陀女を求る。世尊其妙偈を嘆したまふ。滅後に馬鳴菩薩和羅伎を製して。苦空の趣を寓す。僧伽斯羅漢癡華髮を結て脩多羅となす等。みな維法の聖儀なり

此一段在世滅後の儀を引て。開通をあらはすなり

佛在世に般遮翼云云とは。阿含經に出たり。般遮翼とは。乾闥婆神の名。此に五髻といふ。帝釋の樂をつかさとる者なり。跋陀此に賢といふ。董母盧の女四姉妹の姪なり。四姉妹とは。帝釋の妃なり。跋陀女美貌なり。般遮翼これに懷をよせて偈を作り。情を通す。其偈至妙なり。のち帝釋に侍せる時。帝釋佛世尊に參禮せんとす。まづ般遮翼を使して其事を白す。爾時世尊入定したまふ般遮翼世尊入定の前に在て。琉璃琴を彈して。前の偈を歌詠す。其聲琴曲に相應して。妙音を發す。世尊定よりいでゝのち。其妙偈を嘆して。帝釋の來參を許し玉ふ。此事緣なり

滅後に馬鳴菩薩云云とは。滅後とは佛滅後なり。馬鳴とは傳持聖者の名なり。和羅伎とは伎樂の名なり。具に賴吒唎羅伎といふなり。付法藏傳云馬鳴菩薩於華氏城遊行教化欲度彼城諸衆生故作妙伎樂名賴吒唎羅其音清雅哀婉調揚宣說苦空無我之法令作樂者演揚斯音時諸伎人不能解了曲調音節皆悉乖錯爾時馬鳴着白氎衣入衆伎中自擊鐘鼓調和琴瑟音節哀雅曲調成就取要文僧伽斯那羅漢云云とは。百喩經の緣事なり。僧伽斯那は梵語なり此に龍軍といふ。羅漢の名なり。癡は幼年無知の稱なり華髮とは。梵言に脩多羅といふ。天竺國の俗糸を結ひて花をつら

ぬき。是を頭冠にかけて。身の莊嚴とす。是を脩多羅といふ。佛法の中に教文を以て。正道理をつらぬき。散失せざらしむる。彼脩多羅の花をつらぬくことなれは。これもまた脩多羅と名づく。僧伽斯那羅漢世俗無知小兒の所談をとり用ひ。是に佛語を寓して經義となす故に痴華鬘を結て。脩多羅となすと云なり

大抵は今の樂は。古の樂のごとしといふも可なり。若は小臣弄臣侍女小婢の列にありては。綺語に隨順するも可なり。四民のほか遊民の類は。俳優伎樂雜藝を掌て。他の歡笑をもよほすも亦可なり。罪惡を呵するに。時有て惡口をもちゆる等みなならしといふべからす

此一段世間の事例を以て。開通をあらはすなり

今の樂は云云とは。孟子のことばなり

弄臣とは臣下の中才德なくして。君のもてあそび物となる者なり

漢の文帝鄧通を我弄臣と云類なり

侍女小婢等とは。日本記に天の女巧に俳優をなすといふ類なり

四民の外等とは。世にいはゆる。俳人狂歌師の類なり

上は綺語の開なり。罪惡等の下は惡口の開なり

又獵者の夜間の戒を。たもち婬女晝夜分の善を守るも。其德ありといへり。是等の開緣もあふひて聖誥に順すへし。凡庸の徒みだりに經論を取捨するは法滅の相なり

此〻段律中の緣事を引て。開通をあらはすなり。獵者云云とは。有部の律文に出たり。億耳長者路に迷ひて。孤獨地獄處に入。晝分一の住處にいたる。一人の女人ありて。七寶莊嚴の床に坐して歡樂をうく。日沒に及て床下より。蛇蝎百足等の蟲出て。此女を螫す。その苦甚し明る日出るの時に至て蛇蝎等をのづから去りて

歡樂をうくること昨日のごとし。其次に一住處にいたる時夜に及べり。一人の男子あり。七寶の床に在て。飲食臥具等備足し。種々樂をうく日出にいたりて。樂具沒して。諸の毒蟲等聚集し。種々に苦をうくまた日沒に至て昨夜のごとく樂をうく。如是種々經歷し竟て。長者國にかへり。是を迦旋延尊者に問ふ。尊者云前の女人は此國の姪女なり。彼住世のとき。晝分は戒を護持し。夜分は惡業をなす。是故に地獄にありて。夜分の苦をうく。後の男子は此國の獵者なり。夜分は戒を護持して晝分は殺業をなす。是故に今地獄にあれとも。夜分の樂をうくといふ。凡庸の徒云云とは濫托を誡むるの儀なり。涅槃經に城中の乳に水を雜する喩あり。これ末世の者佛語に私說をまゞへて。各自に法を建立するの懸記なり。此類みな法滅の相なり

戒律嚴重にして。規度濫託なし。在世の彌勒文殊も。一辭を贊することあたはす。迦葉舍利弗もたゞ祇奉を知といへり

此一段法の尊重を標し總ゞて。上を結ふなり。規度濫託なしとは事の楷定せるをいふなり。規字書に有法度也又正圜之器也。度は字書に法制也又丈夫也。みなのりと。訓す。濫字書に溢也竊也又失實曰濫みだりと訓す託字書に寄也覬依也俗に云かこつけ也

在世の彌勒文殊も一辭を賛することあたはすとは。餘經は或は菩薩に付して說しめ。或は聲聞に付して說しめ。凡諸天八部の說も佛の印可を受ればみな聖教となるなり。律の法はこれに異なり。唯大聖佛世尊のみ。法度をさだめたまふ。大弟子內弟子たる。彌勒菩薩文殊菩薩迦葉尊者舍利弗尊者のたくひも。唯信受奉行するのみといへり

已上釋意竟

和漢達人の書をあらはす。皆才あり辭ありてことの裁製一時の傑出たり。その中しばらく一二をあげていはゞ。圓位法師か撰集鈔はその隱遁の志をみるべし。その事跡を論するは作者の心にあらず。兼好法師か徒然艸は。瀟洒たる風采なり。是を世の名教を以てみるべきにあらす。平判官か寶物集は。因して寶をもとむるをもひなり。その困苦はいとふべく。その求めは實によし。無住法師の沙石雜談等は。年老て兒孫をあはれむの情あり。今にいたるまでその志かくれず。此類其才愛すへく。その辭玩ぶべし。今の記する處はこれ等の途轍に異なり。如來の至教輪王の大誥上賢聖より承來て。今日にいたる。その才の拙き辭のみじかきは所論ならざるなり

人となる道隨行記終

葛城慈雲尊者垂示

十善略法語隨行記

三寶舘藏版

十善畧法語隨行記

葛城慈雲尊者垂示　　末弟　諦濡謹拜記

蒼々たる長天物あり理あり

蒼々とは。詩に悠々たる蒼天と云。蒼は深青色。青々と同しく。天の色なり。莊子に天の蒼々たる。其遠而無所至極邪と云り。長天とは大空なり。滕王閣序に秋水共長天一色とあり。蒼々たる長天。卽ち高天原を指す。物ありとは天に日月星辰の類。物体あるを云。理ありとは物みな理あり。日は陽にして君たり。月は陰にして臣たり。星は衆多にして人間万事そなはる。諸の道理そなはるを云。如是天上には。一切の物体道理具足して闕失なし。この一篇神道の意に依て。十善を述るゆへ。最初に普く人の仰きみる青々たる大空卽ち神道の高天原にして。此所には万理万物。元よ

り具りて。今日人間万般の物理の基となるを示す。一篇の綱要となす

流行して道となり

此一句は。天道を指示す。論語に夫子の文章は可得聞。夫子の性と天道とは不可得而聞。と云。此天道を揭げ出すなり。天上高天原に。そなはれる。物と理と活物なり。必す縁起して。下界人中に流布し。周行して道となる。道とは人の依りおこなう處。即ち十善にして。人となるの道なり

受得て命となる

此一句は天命を指示す。高天原にそなはれる道理。下界人々の身に受得て。吉凶禍福の分定る。是を天命とす。天上の一月輪。地上の萬水に。影をうつすに嵒の大小に出て。影に差別あるが如し

孔子五十にして天命を知ると云ことなり

雲行雨施して品物形をしく

易の語なり。乾の卦。彖の文なり。雲雨の功に依て。万物生長する。此一隅を以て。三隅を反すべし。高天原に基せる物理。下界にあらはれて。男女大小。まち〳〵わかれ。禽獸蟲類より。山河草木まて。各々その形を受得て。生殖するを云。品物とは万物と云が如し

羽ある者空中に翔る。蹄なる者林藪に走る

上の品物形を。しくと云を承て。別して不殺生戒の張本を述る。也。羽ある者とは鳥なり。蹄なる者とは獸なり。これみな品物形をしける形なり。以上は一篇の大意を述て。不殺生戒の序文となる

其中人の靈たる。天地に參て三才と稱す

品物形をしく中に。別して人を指すゆへ。その中と云。靈とは靈明の義。善良の義なり。書經に惟人万物之靈と云。易には天地の二儀に人を參て三才とす。是等文義を引き用ゆ。人は天地と並ぶ德あれは。若しこれを殺せは。大に天地の道に違背す。凡厮一夫を殺害するも。大殺生の重罪を得ると云り

擴て是を充す。一草一木も小天地なり。蠉飛蝡動も一天地也

擴て充とは孟子の語なり。万物の靈たる人より見れは。蟲の類は微劣なれども。品物形をしくの理を擴て云へは。同しく天地の生理を具するは。小天地なり。此を殺も天地の生理をそこなう。小殺生の罪あると云り。一草一木も。理を究むれは。小天地なり。無益に損すれは。天地の生理に戻るなり。周子も窓前の草を鋤かざりしと云も。此理をみる歟。蠉飛はとび行蟲なり。動は。はいうごく小蟲なり。人は小天地と云は古語なり

相視て逆ことなき

莊子の辭なり。これを假て。畜生蟲類も。人間も同く一天地の生物なれは。互に相逆ざるを云

恩禽獸に及ひ。德草木に被る

不殺生の滿足を云。慈愛の德。禽獸蟲類より。草木に至るまて。生氣あるものにあまねく及ことなり。禽は鳥なり。上の羽ある者と云に應す。獸は上の蹄なる者を云。草木は上の一草一木と云に應す。蠉飛蝡動は鳥と獸との中にこもれり。恩禽獸に及ひ德草木に被るとは古語を用ゆるなり。孟子に云云

世に處して。無病長壽の樂を。たのしむ。是に由るなり

此戒の德を述て。一段の結文とす。世に處してとは。世にありて
と云義なり。不殺生の功德は。無量なれとも。人間の中には。無
病長壽を第一の樂みと。するゆへ。是を擧るなり。書經洪範に。
五福を列して。第一壽なり。是によるとは。この戒の德によるな
り

山川區別して。國に封疆ありて

山川區別とは。蒼天の分付を受け。山川のまち〳〵に別るゝなり
山と川とは國の界限となるものなれは。國々のわかれて。此國と
彼國と。貧富ひとしからぬを云。國に封疆ありとは。封は封内に
て領地なり。疆は疆界にて。國の界限なり。國に大と小とあり。
土に肥と瘠とありて。此國と彼國と。利の齊しからぬことを述て
下の大小有土の君となると云語に應して。上たる者も利して。厚
薄一ぴ定る上は。互に相ひ侵すべからす。若侵せは偷盜の罪ある
ことを。あらはす

物類分付して。利に厚薄あり

物類とは天の物を生する。或は方に隨ひ。時に隨ふ。江南の橘
江北の枳と云か如し。此を人受得て。士農工賈。諸の藝術の家。
彼と是と。物に流類わかるゝなり。今日各々先祖より承來れる業
は。天より人々へわかち與ふるなれは。物類分付と云。士農工商
の類。人々得る所の利。多少ひとしからす。同し農家の中も。同
し商人の中も。利の厚薄。家々に差別し。人々に多少あるゆへ。
利に厚薄ありと云。下の夏畦に汗を滴と云より。身を力に養ふと
云迄の語に應して。下たる者の利も。人々分限定る上は。非理に
取へからす。若取れは。偷盜の罪あるを示す。山川區別と云ひ。

物類分付と云ひ。國に封疆ありと云ひ。利に厚薄ありと云。みな對偶せる語なり。已上は偷盗の境界たる利の差別の本を述て。不偷盗の序分とす

或は龍鬚をよぢ。驥尾に托して。大小有土の君となる

士人立身富貴の利を得る本を云なり。昔し黄帝龍に乗て。天に上ると云り。諸臣此を慕者挽二持龍鬚一者も。みな天に上ると云。それを引て。上中下の人。明君たる人に從て。功を立て。大禄高位を得て。龍鬚を攀つと云。支那の常語なり。驥は千里馬なり。小蟲も驥の尾に付は。千里の遠に到るなり。その如く。庸人も英雄に付て。功業を成す。土地を有つの君なり。周の代の公侯伯子男今大名小名は。大小有土の君なり。この語上の山川區別して。國に封疆ありと云に應して。有土の主も。各分限定りて。猥に他を侵すべからざるの意なり。史記に顔回雖篤學。附驥尾而行益顯と云り

或は夏畦に汗を滴て

農家の利を得る本を云。農人は暑中に耕耘して。汗を流て。田土をうるほせとも休すへからす。耕家の辛苦尤も甚し。夏畦とは。夏の田なり。孟子に出たり。唐李紳か憫農詩に。鋤禾日當午。汗滴滴下土。誰知盤中餐。粒々皆辛苦。この詩の意を含めり。今農家にも。富有の家ありて。其樂王公にも比するあり。此等並に先代の汗血を思へきなり

風霜に利を逐ふ

商賈の利をうる本を云。寒中に風膚を裂と雖。賈買の爲に諸方に來往して休すへからす。上の句と。文を互にするなり。農家も風

霜を忍て耕すべく。商人も熱の苦を避くべからず。此にも富家あ
る。多く先代の勞を知べきなり
或は口を四方に糊し
文學書畫卜筮醫術など。才藝によりて。利を得を云。糊は寄食な
りと注して。他に養はるゝなり。口ならうと訓す
身を力に養ふ
諸〳〵の傭力馬子船頭など。すべて力を勞して利を得を云なり。上に
は口を糊すと云。此には身を養ふと云。文を互にするなり。夏畦
に汗を滴てと云より。これまでは。上の物類分付して。利に厚薄
ありと云句より出て。諸民の利を得る所以を出す。これ下たる者
の利なり。上の利と下の利と。各差別すれば。互に奪ふべからす
少も侵損すれば。偷盗たることを示す

大抵勤夫三世よく門戸を起す
支那周代も。大王より基して。王季文王に至て。天下の三分が二
を有てり。此に準して民庶の上に就ても。大たる者多は三世の功
なりと云り。大抵とは大槩と云か如く決定せぬ義なり。勤夫とは
よく勤めて怠らぬ者を云。三世とは三代なり。門戸とは家門を云
大槩父より子に傳へ子より孫に至て。三代の間怠らす家業を勤む
れは。家を起して富貴になるなり。底意は富貴なるも。先祖より
功を累て得たる財なれは。自ら大切に守るべく。他よりも侵し奪
ふ。べからざることを示す
此中通すべきを通ず
國君より。庶民までの。利をのべ擧るゆへ。此中と云。通すべき
を通ず。とは此の餘れるを以て。彼の不足を補ひ。こゝに有る物

を以て。かしこの無きに易るなど。總して公にして理に應ずるときは。上下互に通用すべし。貧窮をも賑はすべし。他の急に用ふすべし。三寶をも供養すべし。徒に財物を積で。物を救ざるを。守錢の奴なりと。古人も。いやしめたり

海外も我用となる

上に云如く通ずべきを通ずれば。海外の産物も。わが所用となる海外とは。外國を云なり。假令天竺支那朝鮮紅毛たりとも。益あれは。とり用ゆるなり。人參は朝鮮にとり。文字は支那を用ひ。沉香伽羅は。みな海外の産を我用となす

限るべきに限る。右を左にうつさず

正しく不偷盜戒の相なり。私にして道ならざれば。親子の間もその分定る。上は混用すべからず。右を左に用ゆべからす。左を右にましゆべからず。況や一錢一草も。他の物を自に用ゆべからず譬ば口と目とその分定れば。口には味を嘗しむべし。色を見せしむべからず。目には色を見せしむべし。味を知らしむるべからず兄火闌降命有二海幸一。弟彦火々出見尊有二山幸一。兄弟の間たれとも その幸に易用ゆべからざるが如し。右を左に移すことなかれとは大倭姫記に出て。大神宮の神勅なりと云

四民既に庶あり。曰く富し曰教ゆ

四民は士農工商なり。既に庶ありとは。我國民人衆多億兆あるを云。曰富しとは。家に不偷盜を守て。富饒ならしめんとなり。曰教ゆとは。既に富る上は。人々十善によらしむべし。誠の道を以て教へ導んとなり。子適衛冉有僕子曰庶矣哉。冉有曰既庶矣。又何加焉。曰富之。曰既富矣。又何加焉。曰教之と。この語を引用

ゆる也

聚歛の害を詳にし。畜積の陋に達す

上の通ずべきを通ずと云に反して遞るなり。聚歛とは民を虐して多く年貢などを取りおさむるを云。大學に。その聚歛の臣あらんよりは。寧盗臣あらんと云り。聚歛は民の怨を結び。國の滅亡の基となる故。その害盗竊の臣よりも甚し。畜積は財殺をつみて。貧困を救はざるなり。古來亡國の主。無道の君は。聚歛の害ある、ことを知らずして。却て此を利とし。畜積の卑陋なることを思はずして。これを賴みとす。上たる人及ひ民庶に至る迄。この戒によるときは。よく聚歛の害あることを知り。明に畜積のいやしきに達する也

富天地にひとしく。生々の處。受用不盡なる。是によるなり

不偷盗の德を述て。一段の結文とす。此戒滿足するは。三界至る所に福分具足する故。富天地にひとしくと云。この福分未來劫を盡して。かぎりなきゆへ。生々の處、受用不盡と云。これに由るとは。この戒の德によるとなり

道は古今たがはず

道とは上に云流行して道となるの道なり此道古今差別なし。この一句内外諸道儒道百家におしわたりて違なし。今此には不邪淫戒一段の大綱なり

首上に位し。足下に居す

上を承て。古今たがはざるを云。首上にあり足下にあるは。古今かはることなし。首は君父にたとへ。足は臣子にたとふ。人倫揩定して。亂るべからざるを云

前後別あり。左右ところ定る

人倫を以て。此を解せは。前に生るを兄とし。後に生るを弟とす

此を前後別ありとす。右は女の如く。左は男の如し。この男女そのわかれあり。相混ずべからざるに喩て。左右その處定ると云。これ上の道は。古今たがはずと云を承て。君臣父子兄弟夫婦は。古今不易の道なれば。此道に背て。婬逸すれば。人倫を亂し。邪婬の罪あるを云

上を敬ふ諂諛ならず。下を惠む姑息ならず

此亦上を承て。君臣父子は。古今不易。萬國一の道なれは。君父は敬ふべし。諂諛なるべからず。諂諛とはへつらいへつらうなり

臣子は惠むべし。姑息なるべからず。姑息とは義理に當らぬ惠を云。禮記に出たり

隣里睦ぐくして。朋黨にあらず

上下君子。既に蒼々たる長天より定り。分付せる所なれは。隣里も亦道の在ところなり。上に左右と云。此趣なり。交も互に睦ぐくすべし。律文に相召て。薩埵とすと云り。朋黨なるべからず。朋黨とは朋は朋輩なり。黨は徒黨なり。相助て共に私しならざるを黨とす

夫婦和して愛に溺れず

凡そ有情の生あるは。口あつて飲食あり。飲食ありて男女あり。男女ありて夫婦あり。此飲食の一日も欠べからざる如く。欲界の衆生この夫婦の道あり。此道は和の狀なり。夫唱ひ婦隨ふは常の道なり。此中若し私しあれば。必愛におぼれて。道を失ふ。災の本なり。此句は不邪婬戒の緊要なり

家にして家齊ひ。國にして國治る
此戒の德を述るなり。此戒全ければ。家として齊はざるなく。國
として治めざるなし
是より上を云はゞ
此より上とは。此不邪婬より上なるを云。其位階を高天原の三神
天照皇に至まで。歷代齊宮の淸潔。出家沙門の淸淨。不婬戒を云
なり
色聲の外に遊で
色聲香味觸の欲を五欲とす。この五欲を離て。無漏淸淨の行に住
するを。色聲の外に遊と云
よく禮樂の主となり
上に云色聲の外に遊び。神代天照皇戸を閉たまうて。神樂の基を

開たまう。此趣なり。人倫を超過せる人ならでは。實に人倫の軌
範となり難し。禮樂刑政は万國教化の要領なれは。私情に惑ては
其の主となり難し。儒典に其位あれとも。其德なければ。不制禮
樂と云是なり。人道の師となり。世を教へ導くを禮樂の主となる
と云
人倫を超過して。法を万世に垂るなり
不婬淨行の德を述て。一段の結文とす。國常立の尊。男女愛欲の
人に非ずして。歷代帝王の始祖となり玉ふ。國狹槌尊等陰陽昇降
未兆ところに在て。陰陽化育の基を開く。眞の大丈夫のみ有て
法を万世にたれて。一切衆生を濟すべし
眞實語あり。教を待ずして。子弟孝順し。令いまだ下らざるに。庶
民敦に歸す

先不妄語の德を示す。已れ誠あれば。子弟をのつから孝順なり。已れ實なければ。終日教れとも。ます〳〵そむく。令とは命令。上より下に命ずるなり。君誠あれば。庶民おのづから厚敦なり。君誠なければ。數〳〵令すれとも。民いよ〳〵疑ふ。敦とは厚なり不妄語なれは。家に在て子弟も自ら父兄に孝順なり。國に在て庶民も自ら風俗淳厚なり。論語に其身正不令而行。其身不正。雖令不從と。又愼終追遠民德歸厚矣と。これらの語勢をとり來る

必や訟へなからしめんか

庶民敦に歸すれは。非理の訟へなし。至誠は天地も感動す。況や人をや。必す訴訟あるべからす。虞芮の人。文王の德に化せられて。諍訟をやめしか如し。論語に必ずや使無訟乎と云り

一言天下の法となる

此戒の德を述るなり。眞實語の人は。一句の言說も。萬民の式となるべし。一言天下の法となるとは。古語なり

綺飾は眞を傷ふ

綺語の害を云なり。ことばを飾り。あやをなして云へは。眞實の德をやぶる。人間の言說は。德のそなはりたるものなり。綺語なれは。この眞の德を。そこなふなり

麁惡は事を破る

惡口の害を述るなり。麁は麁言。惡は罵詈なり。人間の言音は法として德を具せり。若麁惡なれは。この德を失ひ。必ず事をやぶるなり

德質直に基す

德質直に基すとは。不妄語。不綺語。不惡口。の三戒に通して云

一切の德は。口業の質直なるより起るゆへ。基すと云。功和合に成すとは。正しく不両舌の德を述るなり。功の字は上の德の字に對し。功德の二字を分て示すなり。不両舌なれは。よく人と和合すべし。和合すれは事として成ぜざることなし。故に功は和合に由て成すと云。易二人同心其利斷金。同心之言。其臭如蘭と。この戒の趣なり

殊方も慕ひ。禽獸もなづく。此しるしなり

口業四戒の德を述て。一段の結文とす。殊方とは外國なり。眞實語の國は。外域遠地も。その化を慕ひ。譯を重て貢獻すべし。禽獸もその德になづく。我邦にて和歌の德ある是なり。支那にて韓退之が。文章に感して。鰐魚が處を去りし類なり。自ら麟鳳龜龍も靈瑞を呈するなり

屋舍その制度を過る必す禍をまねく

不貪欲の相を述るなり。万事に足ることを知て外を求めす。自身の分限を守て。過さゝるを。此戒の趣とす。屋舍は家宅なり。家の造營も。分に過て廣大にし。或は華美。或は上を僭するを制度を過ると云。これ必禍の本となる

衣服の分。刀劔の飾。車馬の裝。みな準じ知へし

衣服は上一人より庶人に至るまで。それ〳〵の位階に由て。差別し。人に分限あるゆへ。衣服の分と云。衣服より刀劔のかざり。輿車馬のよそほひまで。皆上の屋舍に準して。自の分を過て華美に。すへからず。上を僭すへからずとなり。是等みな此戒の趣相にして守りやすき所なれとも。世上の人多くは是に由て。身を亡し。家をやぶるなり

智勇世を掩ふ。容貌衆に異なる。名稱の廣く達する。才藝の他に超る等。その愼を忘るへかららず

智惠も勇力も世に並びなきを。世を掩ふと云。姿形人にすぐれて美麗なる。或は奇相あるを。容貌衆に異ると云。名の高くして遠くきこへ。人に讃美せらるを。名稱遠く達すと云。詩文書畫和歌など。諸の藝能の他にまさる等これ皆人の一德にして。貴むへきことなれとも。その愼なければ。却て災禍をまねくなり。これ等は此戒の細相にして。古今英雄と稱せらるゝ人も。愼をわすれ。災をまねくことを不免老子に美好なる者は。不祥の器なりとある

この段の趣なり

其德ありて。其位に居る。其功有て其祿を食む。讓を受て其家に主たる。幸に遇て其財に富む。若し傲心あれは。此もなきにしかず

此一段その相。尤隱微にして。人の忽畧にする所なり。有道の士ならでは。守りがたし。多少の人。此等の地に處して。愼むことをしらす。動もすれは傲心を起す。傲心とは。あなどりをごるの心なり。傲心あれば。祿位等の福も災をまねくの媒となるゆへ。なきにしかずと云。老子に功成名遂身退天之道とある。此段人の愼守るへき所なり

今日にして今日足る。更に來日を期せず。此處に足る。別に外を求めず

正しく不貪欲の趣を示す。此戒を持つものは。貧富貴賤患難逸樂みな天命の有る處を知て。今日居る所に安じて。强て後の幸を待たず。我分に足て更に他の榮曜を羨ず。中庸に君子は素其位而行不願乎其外と云も。此趣なり

生涯爰に全し

上に云如く守れは。一生無事安樂にして。一切の災患なし。生涯とは一生の間を云。此戒の德を示す

よく三界の主となる

此戒の果報を述て。一段の結文とす。上に云。生涯こゝに全とは世間有漏の德なり。これは出世無漏の德を示す。三界とは欲界色界無色界なりこの中に。自在を得るを。王となると云。經の中に一切三界主如來と云あり。法華經に。佛みづから。今此三界。皆是我有と說玉ふ

此人の此世にある。業は報を知らず。報は業を知らず

不瞋恚戒を述んとする大意なり。今日人間。日々作善惡の業は。未來に必ず其報應ありて。違ざるなり。然るに業の業たる。其報

應ることを知らず。又人々苦樂の差別するは。過去に作れる善惡業の報なり。然れとも此報の報たる。過去より來るには非す。現在に生ずるに非ず。いかなる業を作て。今その報を受るなりと云ことを知らず。業は業處に解脫し。報は報處に解脫するを云。華嚴經菩薩門明品の意なり

此知ざる處に道存して。滯らず塞からず

此一行その理幽玄なり。今日所作の業は。未來際を盡し善を作して。更らに又作す。日々受る所の苦樂は。過去善惡業の影なることを知る。すでに是影なれは。此知る處また不可得なり。苦にあへとも憂へず。樂に遇てもほこらず。其苦法門となる。法門の中に苦なし。樂これ法門となる。法門これ樂無きなり。これを道存して滯らす塞らすと云なり。已上は此戒の序の如し

此中樂みあり。間斷なく缺失なし

上に云如く。苦患に處して憂ず。安樂に遇ても傲らず。事にふれて樂みあり。此樂は間斷なし。間斷とは。たへまなり。此樂は缺失なし。缺失とは。かけうせたるなり。內に樂みあれば。おのづから。瞋恚をこるべからず

謬れは憂ふ。道こゝに沒す。迷へば瞋る。樂み爰に失ふ

此戒によらさる者は。苦患にあへば憂ふ。憂ふましき處に憂ふるゆへ。謬れば と云。憂れば この道に遠るゆへ。道こゝに沒すと云沒すとは滅するなり。此戒の理に暗きものは。心に叶さることあれば。瞋る。いかるましき處に瞋る故に。迷へはと云。瞋れは自ら苦しむゆへ。樂みこゝに失と云

失せず沒せず。浩然として天地の間に俯仰す

此戒の德を示すなり。失せず沒せずとは。上に承てこの戒を持ものは。憂なけれは道を失せず。瞋らされば樂みを沒せず。悠々然として天地の間に處して。樂み餘りあり。浩然とは孟子の文字にして。廣く大なる義なり。朱子の註には。盛大流行の貌なりと云俯は地に對し。仰は天に對して云へるなり

彌勒大士云。山は是山。水は是水

一段の結文なり。彌勒は梵語なり。此に慈氏と云。大士とは菩薩の別稱なり。瑜伽論菩薩地世間極成眞實の文なり。此を引て法の當体即道にして。是非をはなれ。得失を存せず。況やうれへ。いかるべけんやとなり。本文には火是火。水是水と云り

周の內史過いへり。國まさに興んとするとき。明神下る。その亡んとするとき。明神降る。虞夏商周みな然りと

周とは文王武王の天下を有つの國號なり。內史は書記を掌る官なり。過はその人の名なり。國の興んとするときは。明神下りて。その德を鑑がみ。國の亡んとするときも。明神降て。その國の惡事をみると云へり虞夏商周の世。みな國の興るときと。亡るときと。明神下りしとなり。虞とは舜の國號。夏は禹王の國號。商は湯王の國號也。左傳莊公三十二年に。神。虢の地に降る。惠王內史過に問。是何の故ぞ。對て曰。國之將興。明神降之。鑑其德也。將亡神又降之。觀其惡也。故有得神以興亦以亡。虞夏商周。皆有之と。此文を引用なり

是支那歷代の鑑なり

是とは上の文を云。支那とは。天竺より。漢土を呼の名なり。今紅毛の國の人も。此名を用るなり。支那の人は。鬼神の道に昧して。神事を談すること希也。たま〳〵談することあるも。末代凡庸は。僻解邪見にして。正を得ず。左傳この一事のみ支那國歷代の。鬼神を論する。龜鑑と。すべしとなり。歷代とは周より已降の代を云

我神道は更に大なりとす

我とは我國を主として。云ことばなり。我國にて云神道は神國に在て。神祇を談す。神代に在て。其代の事を記す。支那の人の。鬼神を說とは。遙に立こへたるゆへ。更に大なりとすと云。下の神道卽ち正知見にして。十善の道たることを述る張本なり

狹霧のはしめ。浮橋の古へ。實に万邦の興起を徵す

我國は開闢の初も。神代よりおこり。万邦の宗國たるを云なり。狹霧とは神代卷に。伊弉諾。伊弉冊の二尊此國洲を生玉はんとし

て。天の狹霧の中に立て曰。吾國を得んと欲すと。又曰伊弉諾尊
伊弉冊尊。天浮橋の上に立て。共に計曰底下。豈國なからんやと。
それよりして後。諸冊二尊の神德を以て。この國土をうみ出し玉
ふ。それゆへ國の闢る初を。狹霧の初。浮橋の古と云。神書には
日本八大洲の興る初を記するなれとも。實は万國も。みな我國の
枝葉なるゆへ。萬邦の興起を徵すと。徵すとは正すと云か如し
其中此國東海に居して。天孫戻り止る。高千穗の寶鉾今に現存す
万邦の中に。別して我國を主として述るゆへ。その中と云。我國
は万邦の東にして。海中にあり。故に東海に居すと云。天孫とは
天照大神之子。天忍穗耳尊。高皇產靈尊の女。栲幡千々姫を娶り
瓊々杵尊を生玉ふ。天照太神の御孫なれは。天孫と云。戻り止る
とは。戻は至るるり。止るは居止玉ふなり。天孫瓊々杵尊。後に

高皇產靈尊の命によりて。葦原中國の主として。初て日向の國高
千穗の峯に降ります。これを戻り止ると云なり。今に至てその地
に天孫の御鉾あり。石に似て。石にあらず。鉄に似て鉄にあら
ず。と云。これを高千穗の寶鉾今に現存すと云。神器の今に現存
せるをあけて。天孫の降り玉ふことを證するなり。委は神代卷等
をみるべし。これ開闢より。神の降り國の主として。民を治さめ
玉ふ。彼縣の地に旦く神の降りし。賢者內史過か格言より。みれ
は更に大なりとする所以なり。
皇祚天壤と共に盡ることなき
天照大神。瓊々杵尊に勅して曰。葦原千五百秋之瑞穗國は。是吾
子孫王たるへきの地なり。宜爾皇孫就て治玉へ。寶祚の隆んこと
當に天壤と與に窮り。なかるべしと。この神勅を引て。天子の繼

統天地あらんかぎりは。斷絶なく。万國にまさることを示す。皇祚とは天子の位を云。天壤は天地なり。我國天子の繼統。神代より連綿することは。實に万國の羨み尊むことなり

文武諸宮。神裔相襲ふ

我國の文宮武宮。今の堂上公卿みな神祇の遠裔なり。裔とは。遠孫にして後胤と云に同じ。四民の中も。神裔なる多し。相襲ふとは。相續〳〵來るを云。これ我國の臣庶も他邦にまさるを云

彼支那諸蠻の。比すべきならす

上より云國の初開と。天孫降て。主となり玉ふと。皇祚の長久なると。諸臣も神裔相承る。これ等の勝事は。獨り我國にのみ具して。支那國及ひ諸〳〵の蠻夷の國の企て及所にあらず。諸蠻とは南蠻をあけて。東夷西戎北狄を兼て云なり。支那人は。みつから中國

中華と稱すれとも我中國よりいへは支那も戎狄。諸蠻の類なるゆへ。支那諸蠻とつらぬるなり。已上は我神國は。他の邦にまさり神道は諸道にすぐれて。十善に相應の不邪見なることを述て下の正知見の序分となる

これに由て謂ふ。神道元來正知見の儀なり

已上正く不邪見を述るなり。是に因てとは。上來神祇の事に由てみれは。我國の神道は。即ち正知見なり。正知見とは。すなはち不邪見なり。此一句實に萬代神學の龜鏡也

我國全く不邪見の式なり

狹霧の初より。人事万般神德ならざることなし。神祇の道全く正知見なれは。我國事は不邪見の式なり。此一句實に十善聖化の龜鏡なり

とも〳〵道を云へし

不邪見の國にして。不邪見の人なれは。共に大道を談すべし。道とは上に云流行して道となる道なり

物外の理なく。理外の物なし

火あれは煖。水あれは濕ふかし如し。水の外に濕性なく。火の外に煖氣なし。その如く。物の外に理なく。理の外に物なし。この物理の論も。最初の物あり理ありと云に應してみるべし

理をそなへて。物位に居す

物にみな理を具して。全きを云。一草一木も。小天地なり

一々塵中に法界をみる

正しく理を具して物位に居するを云。華嚴經の文なり。經に華藏世界の所有の塵一々塵中に法界を見ると云へり。華藏世界とは廣大無邊の國土なり。此國土を碎て。微塵となさは。その微塵の數無量無邊にして。かぎり有へからす。此一々の微塵の中にことゝく法界を具足して。缺減なし。法界を一塵に入て。法界狹からず。一塵を法界に攝して。一塵廣からずと云へり。是を一々塵中に法界を見ると云。華藏世界を見ると云。微塵と云ふなと。委しくは華嚴經を拜覽すべし

物に托して其理全けれは。諸佛の內證智は。今日凡愚の起行に。遠からず

一塵に法界を具するの理万事に推通し。今日人々の作業に推通すこれを物に托して。其理全しと云。凡夫愚蒙の作業に諸佛の內證智を具して。缺減なく。諸佛の內證智は。全く凡愚の一行に圓滿すること。一塵に法界を具してかくる所なきか如し。內證智とは

唯果滿の佛にみ證知し玉ひ。他の窺ひみるへきならぬを云

それ唯孝か。孝は万行の本なり

諸佛の内證智は。凡愚の行に遠からざれは。何れの行も諸佛の行なれとも。中に於て。万行の本は。尤も勤むべきは。孝より先なるはなしとなり餘行の中に。別して孝を擧るゆへ。それ唯孝か

と云へり

經に曰。父母師僧三寶に孝順せよ。孝順は至道の法なりと

上の文を承て。孝の德を述るなり。經とは梵網なり。師とは。和尚。阿闍梨。僧とは僧寶。三寶とは佛法僧寶なり。三寶の中には僧も含すれとも。孝順と云に就て。別して擧るなり。孝順とは順も即ち孝なり。至道の法とは。無上法と云か如し。

又云。若人父母に孝なれは。帝釋天王常に汝か家に在す。大梵天王常に汝か家に在す。

上を承け。父母恩重經を引て。孝の德を述るなり。帝釋は忉利天の主欲界地居天にして。日月四王諸天みな此命令を受るなり。故に若人帝釋の着顧あれは。福智此界に在て。滿足す。大梵天王は色界初禪天の主。空居天なり。此天王は道の主として。天竺四明論の教主なり。この二天王をあげて。一切の天衆神祇も。つねに孝者の家を守護し玉ふことを示すなり。梵天帝釋のその家に在すとは。孝に出て有漏の福を得るを云。如來正遍知者。つねにその家に在すとは。出世無漏の福を得るを云。即ち上の至道の法と云義なり。正徧知者とは。佛の十號の中の一なり

此人天命に順ひて。天福を享す

此人とは孝行の人をさす。梵天帝釋も。その家に在て。福澤を與

へ玉ふ。これ天命に順して。天福をうるなり。こゝに天命と云も
上の受得て。命となると云の命なり
福を享して。其心邪曲ならす。是を直心とす
薄福の人は。心も曲て邪見多し。福を享する人は。自ら心すなを
にして。正知見なり。この正知見を直心とす
經に云。直心これ菩薩の道場
經とは維摩經なり。但し前後取意の文なり。上の直心を承て。此
不邪見の結文とす。三世の諸佛みな摩揭陀國菩提樹下金剛寶石座
上に於て。正覺を成就し玉ふゆへ。この地を號して。道場と云。
無上菩提を成するの場と云義なり。化儀かくの如し。若法を主と
して云はゝ。直心は即ち三世の菩薩無上道を成するの法なるか故
に道場と云

十善これ菩薩の道場なりと
經文を引て。總一篇の結文とす。上來は十善法を述竟るこの十善
に上中下品の差別。世出世の淺深あれとも。漸次に修行して。菩
薩上々品の十善に至り。遂にこれに依て。無上菩提を成就するか
故に。十善是道場と云り。上來且く淺近の理を註して。初心のた
めに畧して。文相を釋するのみ語高く旨深して。小子か如き。諭
劣の窺ひ知る所にあらす。その分文の差違。注解の錯謬は。乃ち
見んもの。是正し玉はんことを希ふのみ

十善畧法語隨行記終

明治卅年四月廿五日印刷
仝　年仝月三十日發行

版權所有

著者相續人　大坂府平民　小松明觀
河内國石川郡白木村大字平石第五十七番屋敷同居

發行者　廣島縣平民　奥野研壽
京都市下京區河原町通松原上二丁目富永町第卅三番戸寄留

印刷者　京都府士族　篠塚勇次郎
京都市下京區御前通新町西入二十五番戸

大賣捌所

京都五條高倉　爲法館　京都古門前　澤田吉左衛門
同寺町五條上ル　藤井佐兵衛　大坂　金尾種次郎
同三條堺町　出雲寺文治郎　名古屋　三浦兼助
同五條高倉　澤田友五郎　東京　哲學書院
同東六條　護法館　同　明教社
同　法藏館　同　鴻明社
同西六條　興教書院　同　森江佐七
同　顯道書院　紀伊高野山　前岡久五郎
同　永田長左衛門　肥後熊本　長崎次郎
同二條　貝葉書院　越後三條　樋口小左衛門
同二條寺町　河合卯之助　加賀金澤　近田太三郎
同六角通　小川多左衛門　美濃大垣　岡安慶助